

人文会ニュース

2004. 11

今期の活動について——代表幹事あいさつ

..... 東京大学出版会 大江治一郎 1

巻頭エッセー 逆説の耐え難い重さ——ジャック・デリダのあとに

..... 慶應義塾大学教授 異 孝之 3

書店現場から 「人文書の読者たち」 三省堂書店 佐伯由美子 5

新規加入出版社紹介 「二度目の再出発です、よろしく」

..... 慶應義塾大学出版会 社長 坂上 弘 7

〈人文会インタビュー〉

日本・アメリカ 図書館事情 経済産業研究所 菅谷明子 10
(聞き手 人文会)

わが社の一冊 (未來社・吉川弘文館・慶應義塾大学出版会) 36

人文会 2004 年春季セット店訪問報告

(創元社 華園 斎・御茶の水書房 平石 修・吉川弘文館 馬場正彦・
大月書店 大和定幸・春秋社 鎌内宣行) 38

「委員会活動方針」 (販売委員会 沼野英生・広報委員会 鎌内宣行) 44

94

ルイス・キヤロル解説

不思議の国の数学ばなし

細井 勉

〔著・訳〕

馴れ親しんだ物語の中に作家の素顔が
かくねんば：数学教師が本業だったキ
ヤロルの作品を、数学の目で完全に解説！



●2730円(税込)

東アジアの歴史教科書はどう書かれているか

――日・中・韓・台の歴史教科書の比較から

中村 哲

〔編著〕

●2730円(税込)

●日本評論社 <http://www.nippyo.co.jp/>
東京都豊島区南大塚3-12-4 ☎ 03-3987-8621

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

ピエール・ベール著作集

エドワード・W・サイード／長原豊訳／鶴岡哲解説
イスラエルとパレスチナの和平に向けた提言。 ○1680円
エドワード・W・サイード／長原豊訳／鶴岡哲解説
諸問題 ○1680円
ドグマ人類学総説 西洋のドグマ的
ピエール・ルジヤンドル／西谷修監訳／轟戸一将ほか訳
西洋 자체を対象とした特異な人類学の全貌。 ○4725円

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

横山源之助全集

立花雄一編(全九巻・別巻1) ▶ 詳細内容見本送呈
第5巻 富蒙史 一 社会思想社からの〈継承出版〉
刊行開始。第一回(通算第四回)配本。一二六〇〇円
▼社会思想社版既刊(三冊)も小局にて取り扱います
①(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
②(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
③(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
④(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑤(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑥(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑦(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑧(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑨(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
⑩(2)巻 各巻一二六〇〇円 / 別巻1九七八〇円
▼内容見本送呈

アンティー・ビーヴァー 川上 洋/訳

第二次大戦の最終局面、空前絶後の総力戦を臨場感あ
ふれる筆致で描き、戦時下の性暴力など「戦争の本質」
を暴く問題作。解説＝石田勇治
● 定価 3990円

ベルリン陥落 1945

世界100万部ベストセラー戦史ノンフィクション！

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.3291-7811 / fax.3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp> *価格は税込

今期の活動について——代表幹事あいさつ

東京大学出版会 大江治一郎

五月二十一日に開催された人文会年次総会において、引き続き私が代表幹事に選出されました。また書記幹事には誠信書房の新保卓夫氏、会計幹事には御茶の水書房の平石修氏が選ばれ、三役を構成することになりました。昨年から体制を変更した委員会構成については巻末名簿のとおりです。販売委員長には草思社の浴野英生氏、弘報委員長には春秋社の鎌内宣行氏が就任しました。なお、この総会で、慶應義塾大学出版会の新加盟と有斐閣の休会が承認されました。一年間この体制で活動しますので、よろしくお願い申し上げます。

人文会にとって創立三十五周年の昨年にはいくつかの記念事業を行いました。

まず、三十代の書店人の方にお集まりいただき「二十一世紀の人文書の棚——三十五歳の主張」というタイトルで座談会を行いました。この内容は『人文会ニュース』91号に掲載しています。次にジュンク堂書店大阪本店（内田樹先生）と紀伊國屋ホール（養老孟司先生）で記念セミナーを開催しました。この内容は同93号と92号に掲載しています。また、全国六書店で記念ブックフェアを実施しました。

そして一番大きい事業として、『人文書のすすめⅢ』を刊行いたしました。これは結成二十周年を迎えた一九八八年に刊行した『人文科学の現在』、その後五年ごとに刊行した『人文書のすすめ』、『人文書のすすめⅡ』に続くものです。気鋭の執筆者にそれぞれの分野の最近の動向について概観し、あるいは問題を提起していくとともに、特約書店の人文書担当の方へのアンケートの結果をまとめています。また主要書店のベテラン担当者の方の協力も得て、人文書の基本図書一覧をアップデートいたしました。ここでは人文書を哲学・思想、心理、宗教、歴史、社会、教育、批評・評

論の七つの中分類に分け、さらに六九の小分類に区分して約五一〇〇点を基本図書としてまとめました。これは書店の棚作り、図書館の蔵書チェック、購入図書の選定資料として、あるいは人文書の基本図書をまとめて知りたいという方には非常に便利でかつ信頼できるものと自負しています。

なお、この基本図書一覧はまもなく、その後の新刊を追加し、さらに在庫・定価などのチェックを実施した上で人文書ホームページ（<http://www.jinbunkai.com/>）に検索システムを備えた上でアップいたします。是非ご活用いただきますようお願いいたします。

その他にも、グループ別特約店訪問、秋の研修旅行（昨年は札幌地区）、書店・取次との研修会、書店の在庫チェックと欠本補充のシステムづくり、各社の「一押し」書目を掲載したファックス同報送信、ジャンル別お薦め商品リストの作成など、人文書の販売のための地道な活動を行つてまいりました。

今年も、書店・取次の皆様との研修・情報交換を基礎に、増売をめざしてさまざまな提案をさせていただくつもりです。一方で皆様からの問題提起・要請には最大限お応えしたいと思います。いつそろのご支援・ご協力をお願いいいたします。

逆説の耐え難い重さ——ジャック・デリダのあとに

巽 孝之（慶應義塾大学文学部教授・アメリカ文学専攻）

ジャック・デリダ墜つ。二〇〇四年十月八日の訃報に接して真っ先に思い出したのは、かつて四半世紀ほど前の一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけて、大学院生だった筆者自身が構造主義や記号論、脱構築思想とともに人文書の一群に耽溺していた時代のことである。

もちろん、デリダと人文主義は必ずしも相容れるものとは受け止められていなかつた。前世紀の末、一九九七年十二月にも、慶應義塾大学文学部は芸文学会の主催になる恒例の年末シンポジウムで、ジョージ・スタイナーをめぐるパネル「外国文学研究の可能性」が開かれ、そのことが話題になつてゐる。なぜスタイナーかといえば、かつて慶應義塾は一九七四年にこの「ラディカルな保守主義者」を招聘し、我が国における多くの代表的知識人との交流を『文学と人間の言語』（三田ライブラリー）なる一冊にまとめた経緯があつたためだ。司会は文学部英米文学専攻で長く中世英文学を講じられ、スタイナー来日にも尽力された安東伸介教授、講師はディドロやアナル学派に造詣の深いフランス文学専攻の鷲見洋一、シェイクスピアやベケットを初めとする英國演劇の権威・高橋康也の各教授と、アメリカ文学専攻の不肖私。脱領域を標榜しつつも古き良き「作品への愛」とともに人文主義の伝統をも見失わぬスタイナーと、脱構築を推進し「言語の行為遂行性」を前掲化して人間中心主義を批判するデリダは、知る人ぞ知る論敵同士であり、案の定この日の質疑応答では、世紀末英文学研究の第一人者である富士川義之教授が投げかけられたのが、「人文主義の危機についてどう思うか」という本質的な問い合わせであつた。何しろスタイナーの理論が文学の擁護から始まるとすれば、デリダの理論はけつときよくのところ文学の否定へ行き着くかのように捉えられていたのだから。

この富士川氏の問いに対し、筆者自身はそのとき、いわゆるフランス的なポスト構造主義がアメリカの実用主義的な土壤に移植される以前より、アメリカでは一九六〇年代ラディカルズムの余波で「学部の闘争」すなわち諸学諸芸術が積極的に交通する学際理論が形成されていたために、もともとアルジエリア独立運動で培われたデリダ的思考は、むしろそうした大学教育上の実践を促進するのに役立つたのではないか、したがつてスタイナー的脱領域とデリダ的脱構築は最終的には妥協点を見出すのではないか、という意味合いのことを答えていた。それから七年ほど経ち、新世紀を迎えたいま、このときの予感は確信に変わった。デリダが一九七四年に前衛的な批評作品『弔鐘』の中で優れたアンティゴネ論を残すと、それを受けたスタイナーが一九八四年にすばり『アンティゴネーの変貌』を完成させるというよう、両者は以前より高度に批評的な対話的想像力を展開してきたが、特に一九八三年にアメリカにおける盟友ボーリ・ド・マンが急逝した後には、むしろデリダのほうが論敵スタイナーの人文主義へ接近していく気配を示すからである。げんにデリダが二〇〇一年に発表した『弔いの仕事』*The Work of Mourning* (Chicago : U of Chicago P) は、死せる友人たちへの切々たる追悼文 (work) の集大成としても、弔いという作業 (work) をめぐる瞑想としても、読みじたえのある一冊となつた。收められているのは、ロラン・バルトやミシェル・フーコー、ジル・ドゥルーズなどほぼ同世代の知の巨人たち十四名の記憶だ。もちろん哲学者デリダは、それぞれの死が独自で単独的なものであるにもかかわらず、それを一般化し複数化する危険を冒すことなしに死者に語らせることはできないという逆説を意識する。親しかつた死者の肉体 (corpse) に忠実であろうとすればするほど、死という本来は内面化できないものを内面化しようとすると、不可能を可能にしようとする不実なる言語 (corpus) のほうが露呈してしまふ逆説を痛感している。だがそうした逆説自体が、いかに正論であるデリダ的脱構築の一般的極意にとどまるだらう。

だからこそ、たとえパリオタールに勧められてワープロを使うようになつた逸話や、自ら楽器の達人であるド・マンがジャズへの造詣の深さを示した逸話を語るときの人間デリダには、まさに自らの「論理」の網の目を突き破つて噴出する「情」を垣間見ることができる。人文主義の危篤とともに「文学の死」が囁かれて久しいものの、デリダは高度に逆説的にして時に情緒的な弔いの戦略を探ることにより、まちがいなく「文学」自身をして語らせ続けていた。それを認識せずして、いま弔いの達人を弔うことはできない。

「人文書の読者たち」

佐伯由美子

著者を交えた書店でのイベントがここ数年来、多くの書店で盛んに行われている。とりわけ、併設のカフェやイベントスペースなどのトークセッション、講演会は増加傾向にある。遅ればせながら当店でも、約一年半ほど前から毎月数回、珈琲店や、店内のスペースなどを使って人文書の著者を招いた、トークイベントを行っている。

もともとは、他店でのイベントの噂を聞くたびに羨ましく、当店でもやりたいと思ったのが始まりだ。過去にさかのぼると数年前に確かに一、二度単発で行ったことがあったという。当時の報告書を探し出し、使用できる場所の検討をするところから手探りで始めた。そうしてこれまでに二十数回、開催したことになる。

回を重ねるうちに、参加者はどういった人たちなのだろうか、と毎回参加者の顔を見るたびに思うようになってきた。というのも、人文書の著者のトークイベントは比較的安定した人気があり、どの著者でも一定数以上は集まる。文芸書などのイベントとは参加者の傾向が明らかに違う。年齢層は多様だが、皆同じように知的な常識人。携帯電話が途中で鳴ることなど、まずない。人文書のイベント参加者には、何か傾向があるみたいだ、と茶飲み話で三つに分けてみたことがある。

まずは、興味を持った本への理解や知識を深めたい、読むさいの参考にしたい、という知識欲から参加する人。難解な理論に対し「間違った読み」をせぬよう指針が欲しいという。彼らは真剣に、講師の話したキーワードや参考文献をメモをし、そのあと関連書も購入していく。学生、社会人、年齢はさまざまだが、まじめな、人文書特有の「プチ研究者」的な読者だ。



筆者近影

次に、著者と話をしたい、会いたい、という「ファン」心理で参加する人。当然その著者の著作の何点かはすでに読んでいて、最近の活動などについても詳しい。講師の話が終わつたあと、質疑応答の時間を設けて欲しい、直接話しを聞いてみたい、という意見はそうした参加者から出てくることが多い。作家やタレントのファンとは違つて、人文書の著者（その多くが大学の先生だが）の話すことを無条件に全て肯定するわけではない。何故この著者がいいのか、自分にとってこの人の著作はどういう位置をしめているのか、といったことを考えながら、著者に共感し、尊敬し、時には批判的になりながらもファンの者にサインや握手を求めたりする。

そして三つめが、書店でのイベントが好きな人。イベントの回を重ねるうち、また私が他店のイベントに参加することで見えてきた人たちだ。募集を始めるとすぐに予約をし、当日は比較的前の方の席に陣取る。人文書の著者のイベントと言えば欠かさず顔を出す。だからといって熱心にメモをするわけでも、終了後握手を求めに行列に並ぶわけでもない。感想も未記入のことが多い。冗談半分に「講演会マニア」と呼ばせて頂いている。

そうした「マニア」たちは、他店のイベントもチエックをしていて、同日であれば時間差で講演会をハシゴをすることも厭わない。ただし参加するからといって本を買うか否かは、別問題。他の参加者と比較しても本の購入に関しては、大変シビアなのが特徴だ。イベントには立ち読み感覚で参加しているのだろう。

三つの参加者像、それはまぎれもない人文書の読者たちの姿だと思う。そして三つめにあげた「講演会マニア」と、いずれのイベントにも参加しないで、店頭で黙々と本を選ぶ無口な読者をどれだけ店に引き込み、購買に結び付けられるかが、イベントを続けていく上でのこれから課題だ。東京の大型店の競争は激化するばかりの昨今、神保町にある当店において、何ができるかを考えている。

（筆者は三省堂書店神田本店4F人文書担当）

「二度目の再出発です、よろしく」

坂上 弘

最近は毎日のように、「本は二度生まれる」と自分に言い聞かせております。フランスの啓蒙思想家ルッソーは『エミール』の中で、「人間は二度生まれる、一回目は存在するために、二回目は自ら生きるために」と言いましたが、このひそみにならつて言えば、本は二度生まれる。一度は出来上つたとき、二度目は人に読まれたときということになります。つまり、出版人はつくるだけでは一人前ではない。それだけでは赤子を産んで産着も着せず、社会に役立つ場所へと成長させもせずにいる無責任な親とかわりありません。PRや販売のための準備を怠りなく、取次様・書店様へ届けるキメ細い行動を着実に行わなければつくつた本が生きていけない、と言い聞かせております。

これは、名だたる先輩書肆にはあたり前のことでしょうが、私共にはこれが出発点です。今年の五月に人文会に入れていただきながらとくにそう思います。この五月は私共には記念すべき時期でした。人文会会員の二十社をお訪ねして入会のお願いをして歩いたからです。訪問してみるとそれぞれの応接室にはなんと高校生の頃から夢中で読んだ人文系の名著がずらりと並んでおり、感激しました。

いろいろなご質問の中に、慶應義塾大学出版会は大学の一機関か、というお話がありました。株式会社です、と私はお答えしました。「一身独立して一国独立する事」という福澤諭吉の言葉をうかべておりました。福澤流に言えば、株式会社とは自分の力によって食べることに全員が協力者として働いている所、という意味です。全社員が黒字で無借金の集団を目指すことを意味します。

私共は一九四七年、戦後最も早い時期にスタートした慶應義塾大学の通信教育部の仕事を支援するために、図書印刷

などいくつかの会社が出資して設立された会社です。いわば学事の実務の一部と教材出版がアウトソーシングされた会社です。この慶應通信という社名を慶應義塾大学出版会に名称変更したのは一九九六年、いまから八年前です。当時、再出発した私共は、二十一世紀の新しい総合大学像を掲げて教育と研究の両面で大規模な改革に取り組む大学側と連携して、そこで得られる学術成果の発信を出版を通じてどう担つていくかを、当面の課題としました。これは、大学出版部の存在意義・役割からの帰結であつて、大学の方向と相俟つて、その姿を指していました。

ちょうどその頃、オックスフォード・ユニバーシティ・プレスを訪ねる機会がありました。最も新しいプロジェクトを三つ見せてほしい、と頼むと、早速案内してくれたのがマルチメディア出版、インターラクティブ・ティーチング・システム、それにOEDの第三版の作業現場でした。OED第三版はあと何年かかるかわからない、五十台以上のパソコンで世界中の英語の用法を取り込んで編集している壮大な事業でした。しかし学術出版という在来線のヨコに新幹線を走らせる構想のように思いました。ちなみにこの第三版はまだまだ編集を重ねねばならず、二〇一〇年がターゲットだそうです。

たしかにIT時代の二十一世紀には、出版もかわってきます。こういう時代にどんな夢を描くべきかです。

私共は慶應通信時代に学問の成果である教科書の出版は百六十冊に及んでいます。その中には井筒俊彦『ロシア文学講座』（後の『ロシア的人間』）、松本正夫『西洋哲学史』、大出晁『論理学入門』など、当時少壯氣鋭だった先生方の名著がたくさん含まれておりました。また中国研究の中心であつた石川忠雄をはじめとする東洋・西洋の歴史も含まれておりました。慶應の通信教育のコースには法・経済・商・文学部の四学部がありますが、通学と同じ卒業資格を与える科であつて難しい内容です。教科書を書く若手教授もご自身の最先端の内容を教科書に書く慣わしです。従つて、出版会に社名変更したといつても、澤田次郎『近代日本のアメリカ観』、柴田平二郎『中世の春』、西脇与作『現代哲学入門』など人文系の著作が中心で、高い評価を得た本を出版させていたぐくことができました。

出版会になつてからの『浅利慶太著述集全四巻』やJ.C.ホルトの大著『マグナ・カルタ』、H・ヴエルフリンの不朽の名著『美術史の基礎概念』などは人文書への新しい挑戦でした。なかでも、近代日本研究に不可欠の『福澤諭吉著作集 全十二巻』は、若手の福澤研究者が各巻を編纂し、研究成果を踏まえた語注、解説、現代かなづかいによる新

編集で刊行した結果、好成績をあげることができました。ちなみにこの著作集は福澤の生前に出版されたもの、及び原本、自筆原稿との照合できるものに準拠するという方針で、編集しております。

総合大学の広範な分野での知的創造、文明の継承活動を、出版事業を通じて支援し、質の高い専門書・啓蒙書を時宜に合わせて世に送り出すことが大学出版会としての私共の使命です。これは確かにとどまらず、成熟社会を迎えた今日、哲学・思想・歴史・芸術の書籍には、学塾を越え、領域を越えて、ますますボーダレスかつグローバルになりつつある知の広場からの発信、という考え方が必要です。これらの方針を担うことによって、出版に挑戦する人材が育つであろうというのが私共の夢です。

こうしてはじまつた再出発から八年、現在、新刊点数は年間七、八十点のレベルになりました。気がつくと人文系の書籍がその四十パーセントを占めるに至りました。新刊では、渡辺靖『アフター・アメリカ』、小熊英一『市民と武装』、大出晁（訳）『エラスムス・痴愚礼讃』、大津由紀雄（編著）『小学校での英語教育は必要か』などが読者の支持をいただいている本です。ベストセラーを狙うようなことより、着実に長く読書界に届けて行くという義務がありますが、本当のターゲットがわかっている書店様にお願いをし、協力をかちとらねばなりません。

このような課題をクリアする販売体制の構築ができるかどうか、と大変悩んでいたところへ、出版と流通が一体となって三十年もまえから同じ目標をもって活動しておられる人文会があることを知りました。販売は人なり、です。「販売のKUP」を目標に人文会に入れていたことによって人の輪をひろげて行けるのを楽しみにしております。

（慶應義塾大学出版会株式会社　社長）

〈人文会インタビュー〉

日本・アメリカ 図書館事情

経済産業研究所 菅谷 明子

聞く人 人文会 大江治一郎 (代表幹事)

段塚 省吾 (図書館委員会)
佐藤 英明 (弘報委員会)

『未来をつくる図書館』

佐藤 今日はお忙しいところ、人文会のためにお時間を

いただき有難うございます。人文会では年三回ほど「人文会ニュース」という小冊子を発行しておりますけど、その原稿をいただこうと思いましたら、なかなか時間がとれないということで、今日はこういう形でお話を伺いすることになりました。三人も押しかけて恐縮です。

菅谷 それはどうも。なかなか時間が取れなくて、ちら

こそ失礼いたしました。

佐藤 早速ですが、先生は昨年(一〇〇三年)九月、岩

波書店さんより『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告』という新書を上梓なさいました。アメリカ

の進んだその内容を拝見したとき、けつこうな衝撃を受けました。

菅谷 そうですね。講演会や本の反応をみると、多少のショックを受けている方が多く見受けられるようです。

大江 この本は図書館だけではなく、出版界にもなかなか役に立つのではないかと思っています。出版界の中には部分的には図書館を敵視するような向きもあるのですが、そういう人にも読んでもらいたいですね。

菅谷 でも、どういうところが出版界の役に立つと思つていただけたのですか。

大江 われわれ、とくに専門書の出版社にとつて図書館というのは重要な顧客なのです。そこがどういう状況に

なるかによつて、こちらの商品に響くことが一番大きな問題です。例えば、むかしは名古屋の市立図書館だつたら、小社（東京大学出版会）の刊行物は一三館のすべてに基本的な書籍が入つたのですが、現在は一冊です。一方で電子情報の普及はプラスもあると思いますが、予算の問題や司書の配置などの問題と絡んで、結局は図書館での専門書の購入が小さくなつてきてる。図書館の仕事というのはいろいろあるとは思いますが、先生がお書きになつてゐるような方向で、レンタルや基本図書など、こうしたものを持ちとそろえた上で、さまざまなサービスも可能になつていくのではないか、そうした意味で、出版社も図書館の事情と図書館の蔵書を考えた上で何をすればよいか、こうした事を考へてゐるということです。

菅谷 そうですね。アメリカは日本より公共図書館の数が五倍くらい多い。日本は二六〇〇館で、アメリカは一万三〇〇〇館くらいです。逆に言うと図書館があるから中小の出版社は成り立つてゐるということがある。だからそういうことも考へていく。そうすると、いわゆるみんながお金を出して買えるような本は図書館は揃えてもいいんですけど、それにそんなに費用をかけずに、ほかにないからこそ図書館で借りられるような学術書とか専

門的な分野の本があると、棲み分けになつていくのかなという気がします。

大江 中小版元の場合、図書館の購入によつて成り立つてたところが大きかつたのですが、その部分が失われてしまつてゐるという現状があります。だから区立図書館などはやはり貸し出し重視ということになつてます。

お客様というんですか、図書館はそういうふうにおつしゃいますけれども、お客様になつてくると、やっぱりそういう人のニーズに応えた本を揃えるという回転になつてゐると思います。もし、しつかりした本があつて、図書館に行けばいろいろなことが調べられるということになれば、今は図書館に期待していないうな人たちも図書館に行つてというような形になるんじやないかと思つてゐるんです。

菅谷 そうですね。

佐藤 浦安図書館は利用者、それに見学者も非常に多い。

菅谷 一応、日本の一の図書館ですからね。だから浦安みたいのが平均というか、普通のアメリカの図書館。浦安よりもっとレベルは高いです。もちろん地域によつて、アメリカの場合はやはり貧富の格差があるし、どうしても税収で成り立つてゐるので、裕福な地域とそうでない地域のレベルの差は逆に大きい。下を見ると日本よりも

つとひどいところもいっぱいあるんですけど、でも全体的に見るとやっぱり浦安は普通かその下くらい。

佐藤 そういう意味で、アメリカの図書館のすごさは、『未来をつくる図書館』を読んでいただいて、今日はとくにこの本のむすびの部分に光をあてていただきたい。

菅谷 あの本の結びが短くてね、本当はもっと長く書きたかった。とにかく二三〇ページに抑えないと予算がとか言われて、涙のんで。（笑）

情報を与える図書館

佐藤 アメリカに学んで目からうろこの話はともかく、この本の結びにある日本の図書館を進化させるためには、やはり我々を含めてどんなことが必要なのかという、その辺を今日はお話ししたい。

菅谷 分かりました。やっぱり一番の問題は、もちろん予算が無い、人がいない、政策がしつかりしていないといろいろあるんですけど、やっぱり日本の図書館で問題なのは、やる気がない。やろうと思えばできるんですけど、身近な例だと、ビジネス支援のサービスというと、ちょっと皆さんとは違うかもしれないですが、例えば足立区の竹の塚図書館は蔵書五万冊くらいの決して大きい図書館ではないんですけど、その館長さんは図書館をもつ

とよくしたいという意欲がすごくおありの方で、ビジネス掲示板といったものを作つて、そこにいろいろな地域の情報を張り出している。

あるいは本とは違いますけれど、地域によく求人情報のチラシが入つてくることがありますよね。みんな捨ててしまっているのですが、そういうものを取つておいて閲覧できるようにする。就職活動をしている人はそんなに何紙も取れないですし、新聞を取ることも大変な方もいらっしゃると思うんですけど、そういうこともしています。

それからこれは予算がついていますけど、福岡県立図書館ではビジネス支援にすごく力を入れているんですけど、コーナーを作ります。つまり今までだと分類番号順にすごく分散しています。例えばビジネス関係の新聞は新聞のセクション、ビジネス雑誌は雑誌のコーナーというふうに全部分かれていたのを、例えばビジネスという切り口で一つのところにまとめる。これまでだと分類番号順で探して行くわけで、相当意志が必要です。ところがビジネス書を欲しいと思う人が、コーナーになつていると何となくぶらついてみると、今まで埋もれていた資料が広く見られるようになつたりしています。だから例えばそういうふうに、今あるものをアレン



菅谷明子先生

ジし直すだけでもできることはけつこうあります。

それからやはり図書館としては、一番大事なのはレンズのサービスだと思います。情報をどうやって利用者が欲しいところにあるかを探してあげる、手伝いをするということだと思います。日本ではカウンターというのはあつても貸し出しカウンターであつて、レファレンスということを普通の市民は知らないわけです。浦安図書館がすごいと言つても当たり前なんですが、本の相談窓口という案内板をカウンターに一つ書いているだけで、じや、相談ができるんだなというのは分かります。でも普通の、例えば日比谷図書館や他の図書館に行つても何もないんです。返すところ、借りるところだけで。そうするとやっぱり利用者としては、図書館というのは本のさまざまな相談ができるところだとあまり認識していない。

そういう案内板を一枚張り出すだけでも違うでしょうし、さつき言つたようなビジネス書を一か所にまとめることが難しいとすれば、例えばパンフレットのようなものを作る。大学生でレポートを書こうと思えば、論文の書き方というこれこれの本がありますよという文献リストと、棚のどこにありますというパンフレットを作つたら、それはそれで使えると思うのです。そういう工夫と

いうのがほとんど行われていなくて、単純に分類番号順に並べたものを、お客様が借りるのを待っている。そういうことでいまでは終わっていますよね。市民の人も、ただで本が借りられるというのはすごくありがたいので、それである意味でけつこう満足しているようなどころもあると思うのです。でも、もつともつといろいろな使い方があるということをアピールしていくだけでも、私はやつぱり違つてくるんじやないかと思います。

でも、それをもう一つひねると、そういうふうに本の相談ができますよと前面に出さないのは、自分たちに自信がないわけですよね。積極的にアピールしてしまって、いろいろな人が相談に来た時に今のスタッフでは対応しきれないから、そういうことをあえて言わないというところもある。すごく問題は複雑で、こうしたら今の日本の図書館は良くなるということを追求すると、すごく難しいのです。ただ繰り返しになりますけれど、結局、図書館がいいところだと思わないし、市民も支持しないし予算も回つて来ないし、いいスタッフも来ないわけです。だからどこから始めるかというと、図書館にはすごく可能性があるんだというところから始めないと、結果的にはどこも動かないと思うのです。

だから、私自身が『未来をつくる図書館』を書いたと

いうのもそういう理由なんです。そこをどうするかといふと、やはり図書館の人が何かするしかないんですよね。いま言つたような、現状のサービスを少しアレンジするだけで、お金もかけずにそんなに手間もかけずに、できることをいかに提供していくかということだと思つんですけどね。

佐藤 本 자체も情報ですよね。

菅谷 もちろんそうです。

佐藤 さまざまな情報を図書館が市民のために共有していくんだというイメージをさらに図書館が刷新していくというか。

菅谷 そうですね。だからどうしても図書館というと、新しい本や昔はやつた本を借りる場所だと思つている人が多いと思うんです。私自身としては、昔の日本であればお金の無い人がいたから、図書館が無料で本を貸して知的レベルを上げるという目標は良かつたと思うんです。もちろん今でも本を買えない人というのはたくさんいらっしゃることはいらつしやると思うんですけど、主流としては、必要があればお金を出せば買える人がほとんどだと思うのです。そうでない部分を図書館が担うことが大事だし、市民の側も情報を活用することを知らないわけです。

例えば病気になつた時にどうするかなど、皆さん、ガン克服みたいなハウツー本を買ってきて、一冊読むという話だと思います。でももつと多角的に調べれば、例えば自分にかかわるようなものの専門誌のインデックスを使って、どういうふうにそういう研究が進められてきているかとか、新しい開発が出て来ているのだろうかを、例えば新聞や雑誌を使って検索して調べていくということもあります。それから医学書も、誰が書いているかによって治療の立場というのはぜんぜん違うわけです。こうしたことを見していくとか、そういうことですね。あとは最近、データベースの情報が常に更新されているので、そういうものを見て、多角的に情報を使って初めて一番いい判断ができると思うのです。

でも、そういうこと自体がわからなくて、どうしても本を一冊読めばいいという感覚がすごく強いのです。だから逆に言うと、アメリカの本はインデックスがすごくしっかりと書いていますし、どんな本でも必ずインデックスが後ろに付いています。

それはおそらく文化的な背景として、特にアメリカは、情報を多角的に集めて調べていくところがすごく根付いている。それと子どもの時からの図書館教育が盛んなのです。だから何かあつたら、大人になつてもまず

図書館に行つてみようと思うのは、多分そういうことの積み重ねもあると思うんですね。日本人は、ものをいろいろ集めてきて探すということはあまり考えないです。だからすごく時間がかかるかもしれないんですけど、今後、例えば日本の出版文化のようなものをどうするかと考える時、やはりそうした資料を使いこなす市民を育てていくということをしなければいけないのではないかと思うのです。

アメリカはもちろん図書館利用教育がすごく盛んなので、図書館に来て何か資料を探して、よく分からぬ人に対してもマン・ツー・マンでいろいろ教えてくれたりする。そうすると、あ、そうか、情報というのはそんなふうに探せばいいんだなということになつて、必然的にいろいろな文献が必要になります。だから、その辺もやつていく必要があるのかなど。しかも今ちょうど、調べ学習が増えています。大学の授業でも、私も大学で講師していますけど、レポートを見ているとひどいもんです。カット・アンド・ペーストで、文章を読みこなしてといふところが弱い。だからそういう意味でも、情報を探し読みこむ教育をもつとしていかなくてはいけないんじゃないかと思います。

ただ、いわゆる文字というのを活字というふうに考えて

ると、一般論ですけど、出版社の方はどうしても活字に使うところがあると思うのですが、私はやはりデジタル情報というのはこれからすごく可能性があると思うのです。だからデジタルであれ紙であれ、文字の情報というのは変わらないですから、そういう意味で、文字に書かれた情報をどんなふうに使いこなしていくのか。そういう市民を小さいうちからいかに育てていくかといふのは、逆にそれが無いと、図書館はうまく利用されないと思いますね。

データベース

佐藤 文字や言葉をどう考えるか、根本的な問題ですね。現在、コンテンツの配信や電子ブックなどが業界の話題になっていますが、これから出版社もデジタルと、いわゆる本のかかわりということを相当考えないといけない時代になってきてることは事実なんですけどね。

菅谷 紀伊國屋さんなどは、けつこうビジネス図書館なんかをサポートしていただいている。でも、新聞社などは一般的に、デジタル情報で提供すると活字のものが売れないから、データベースをあまり図書館に流通させたくないというのが、大半の言い分なのです。

私から見るとすごく変な話で、データベースにお金を

出しても、まず市民は契約できないです。だいたい法人です。個人で買つてもすごく高いので、例えば一件二〇〇円でもやっぱり考えるというのが現状だと思うのです。ところが日本に二六〇〇館の公共図書館があつて、例えればデータベースを使っての図書館が一年間に一万円払つたとしても二六〇〇万円です。今はほとんどデジタル原稿でやつてあるわけですから、データベースさえ構築してしまえば、今までまったく無かつたマーケットに、それだけデジタル情報が広がるということだと思うのです。例えばデータベースを使って慣れて来れば、すごく便利なことが分かるので、そのありがたみが分かれば今度はお金を出しても買う人というのが出てくると思うのです。だからそういうふうに考えると、デジタルのマーケットというのはそんなにネガティブに、つまりゼロサムで、デジタルが増えれば活字が無くなるというわけではないと思うのです。九五年くらいにインターネットが出てきた頃は、二〇〇〇年くらいになると紙の新聞は無いとか、紙の本は無くなるとかよく言われていましたけど、今でもぜんぜんそんなことはないですね。だから新聞というか、紙は紙の良さがあるし、デジタルデータはデジタルデータの良さがあって、例えば新聞でいうと毎日、新聞を読むというのは、その日付で切つてあるわけです。

今日のニュースということです。でもデータベースで調べるなどと、例えば白水社さんの業績を過去二〇年分調べたいとかいう場合、新聞で調べるのはすごく面倒なので、白水社というふうに入れて二〇年分のビジネスデータを取つてくるほうがずっと楽なわけです。

だからメディアによつて特性が違うので競合するということではなくて、むしろそういうことがあることによつて、マークетが増えていくと思うのです。だからアメリカの場合は今ほとんどの図書館がデータベースを入れていまして、相当大きいマークетになつていています。だからなぜそんなに否定的にとらえるのかなというのだが、私は逆に不思議なんです。

佐藤 白水社には二十年分のデータベースなどありますけど、例えば朝日新聞などの場合ですね。

菅谷 以前、朝日新聞の方にお話を伺いしたことがありますが、一枚五〇〇万円のCD-ROMでも、十枚売つたほうがいいと思っているんですよ。でも逆の考え方でいうと、トータル五〇〇〇万だと日本全国の図書館は二六〇〇館あるので、一件につき二万円で売れば、例えば極端な話ですが同じ収益になるわけです。それでもやはり損だと思っているみたいですね。

大江 出版社の場合には、あまりデータベースを持つて

いるところはないですから。新聞を除いて。

菅谷 日経はたくさん持つていますからね。

大江 東洋経済は『四季報』、あそこは紙も売つていて、デジタルデータも売つています。そうしたデータは図書館には、僕はよく知らないんですけど、入つていると

ころはほとんどないんですか。

菅谷 日経テレコムの一部を入れてあるところはかなり増えてきまして、すごくリッチなところだと帝国データバンクのデータベースを入れてあるところがあります。ただ数としてはそんなに多くないですけど、増えてはきていくと思います。

大江 データベースを購入していかなければぐらいの意識は、だいぶ県立クラスになると持つてている。導入も始めていらっしゃるところが多いと。

菅谷 ただ、さつきの利用者教育に戻るんですけど、私もいろいろなところで講演するんですけど、図書館員の人々が集まるところで、データベースの話をする前に確認するためにはデータベースを使ったことがありますかと聞くと、ほとんどの人が無いのです。だから、ましてや公共図書館に来るような一般市民の人たちだと、ほとんど使つたことはないのです。浦安図書館はそうでもないですけど、ほかの県立図書館などでも、入れていても実際

使う人はすごく少ない。

では、利用者教育みたいなのをしているんですかといふと、していないと言ふんですよ。そうするとまつたく宝の持ち腐れだと思うんです。使わないし、ぜんぜん使つたことの無い人にはピンと来ないとと思うんですよ。だから利用者教育などもあわせてやつていくようなことをしないと、それは多分学術書の利用なども同じことだと思うのです。ただ並んでいても、なんか難しそうだなということだけだと思つんですけど、こういう使い方があるのだともつとデモンストレーション、スーパーでやつてあるようにお客さんが来るのを待つてゐるのではなくて、こういうふうに使うと役に立ちますよ、もつと宣伝活動をする必要があるんじゃないかという気がします。

佐藤 本のデータベースでも、国立情報学研究所の Web Cat Plus のようにすばらしいものもあります。

大江 あるけど、図書館の人が使つてるのは分

からないよ。出版社はよく使つてゐるんです。これは書誌データベースとしては大きいし、出版社が使つるのは図書館の在庫が分かるからということで使つんですけれども、図書館側は使わないです。

佐藤 そのあたりがちょっと。ネットワークの話になりますと、アメリカでは相当進んでおりますか。

菅谷 そうですね。例えばニューヨークの場合だと、提携していいる図書館が一二〇〇館ほどあるのです。それが一括で蔵書検索ができます。だから自分のところに無くても、ほかのところから借りられるというシステムは、日本から比べるとかなり進んでいますね。だから逆に言

うと、一つ一つの図書館は小さくても、小さいところを窓口にして世界に広がるみたいな、そういう展開はできています。それからだんだんデジタル化が進んでくると、物理的に巨大な中央館が無くても、ネットワークでつながつていれば、そこに物理的になくとも、どこから取り寄せができるということも可能になつてくるので、そういう面では進んでいます。それは歴史的に図書館相互の横のつながりというのがあって、アメリカは図書館だけではなく、社会的にそういう横のつながりをすごく大事にするところなのです。

図書館人とは

菅谷 でも逆に日本だと、先日東京二三三区特別区研修の講師に行つてきたのですが、二三三区でもぜんぜん知らないのです。横のつながりがすごく弱いのです。私はいつも思うんですけど、全国に一〇万人の問題意識のある人がいるのと、五〇〇〇人のパワフルな人がいるのでは、

五〇〇〇人のほうが絶対に勝つと思ひます。やはりつながつて力を持てるようになると思うんですけど、図書館の人は何かつながらつていないです。やはり図書館員は公務員なんですね。公務員という方が悪いのですが、要するに二、三年いて、水道課に行つたり土木課に行つたり別の課に行くということで、図書館に本当に就職したくている人ではないから、それはおそらく、ほかの課でも一緒だと思うのです。浦安図書館は直接採用していますから、勤続の長い方がたくさんいらっしゃいます。やる気も出で来るし、一生懸命やつたことが評価されるということもある。図書館というところは、土、日は出勤だし、毎日残業もありますよね、五時になんか終わらないわけですから。

段塚 そういうことでいいますとね、私の住んでいところでも、どこも最近、いっぱいパートさんを入れていますよね。そういうのはおかしいと思ひながら、現実にはパートで働いている方のほうが、本のことがずっとよく分かっているし、よく勉強する。さつきおつしやつた二、三年で変わる公務員の方というのは、官僚的だたというのは、たぶんどこでも、最近の図書館は親切になつたというふうに思われているケースが多い。

菅谷 そうですね。図書館員の人はそういうことにつ

く反対をしていますけどね。でも確かにそういうところもあると思います。だからやはり、やる気があつて、図書館を良くしたいという人が採用されるようなシステムにするのも、一つの図書館改革かなと思うんですけども。段塚 逆に最近、それこそ外部にアウトソーシングでカウンター業務や普通の業務を発注される自治体も出でますけれど、そのあたりアメリカは実際のところ、別会社が入つてているケースはありますか。

菅谷 あまり無いと思います。私も全部調べたわけではありませんし、アメリカはやはり地域によつてぜんぜん違うんですね。ただ普通は、日本だと教育委員会があってその下に図書館があるので、教育委員会がほとんどボリシーを決めるというところがあるのですが、アメリカの場合は図書館省というのが一つあるのです。だから図書館として独立しているのです。そういう中でやつていて、直接採用しているので、彼らも公務員という意味では同じなんですけど、専門職として採用されるのです。ただ、さつきおつしやつたみたいに、アメリカの場合はすごくヒエラルキーがあつて、だいたい本の整理をするのは高校生のアルバイトです。カウンターでたんに貸し出しをしているのは普通の大人のアルバイトのような感じで、専門職は専門的なことにつくこう特化して仕事

ができるのです、良かれ悪しかれ。でも日本の場合はだいたい職員が全部やるのです。棚の整理もするし、貸し出しカウンターにも立つし、企画も立てる。ある意味で日本流の平等主義というか、それもあるのですが、逆に言うと、せっかくのいい人材をそこに投入できないということにもつながると思うのです。そういう意味ではアルバイトとか外部のいわゆるフルタイムでないスタッフというのは、アメリカは多いと思います。ただ上部の専門性を持つ人たちがかなりがつちり固めてやっているというところがあるのです。だから変な話ですけど、棚の整理をするのはそれほど高度な技術が必要なわけではないのです。そのへんは割り切って、アルバイトに任せています。

大江 そうすると、ある意味で今の棚の整理やいわゆる貸し出しの窓口業務という部分はかりに外注になつても、それはそれでいいのですか。

菅谷 いいというか、どこに焦点を置くかだと思うんですね。

段塚 基本的な企画とか、そういうプロモーション的なところ、その人材まで外に発注してしまうというようなことは、当然アメリカではありえないということですか。

菅谷 いや、そういうこともないと思います。例えばインターネットのサイトは今はどこでもやっていますが、そういうところはけつこう外注しているところが多いですね。だから日本とおそらく、考え方が違うと思うんです。アメリカは企業などでもほとんど全員、契約社員です。日本みたいに一回入社したら、いま日本も変わってきていますけど、年功序列でずっと行くということはもともとなくて、みんな何年かで移つてしまふような世界です。そういうことでいうと、外注するとかしないとかいう考え方とは少し違うかも知れません。もともと、みんな外注というか、もともと皆さん、年ベースの契約みたいな感じだと思うのです。だから日本式で分けるのと、ちょっと考え方方が違うかもしれないですね。

唯一違うとすれば、専門職でそれなりの専門能力を持つている人たちは、そういう業務に特化できるような体制はできていると言えると思います。だから私が前に調査した時には、カウンター業務にデパートの店員をヘッド・ハンティングしたという例があるのです。なぜかというと接客のプロですよね。だからそういう人たちに、カウンターに立つて欲しいというコンセプトになります。

大江 先ほどの中核になる人たちの仕事の内容や、予算の増額などが問題になりましたが、どっちが先かという

と、いま心ある図書館員の何人かが、お互に交流しながらここでいろいろと工夫をするということから始まるんじゃないかと思うんですが。

菅谷 そうですね。それしか方法はないと思います。そういうことを積み重ねていって、図書館というところは役に立つところなんだなあと。例えば浦安図書館だと、議会の議員の人たちに毎月だつたと思いますが、彼らの仕事にかかわりそうな雑誌の目次のページをコピーして配るとか、行政マンの人たちに役立ちそうな資料を作つて文献リストを作つたりして配るとか、そんなことをしているのです。それも予算の戦略ですよね。つまりそういうPRをすると、図書館で実は使えるところなんだなということが理解されるんじやないか。

大江 非常に現実的な問題としては、そういう政治が必要だと感じているんですけども、結局みんな自治体だから、自治体の議会や行政に図書館が役に立つということを示さないといけないということですね。だから学校図書館用の予算を国がつけても、みんなほかのことにつつてしまふというのはそういう問題がある。

菅谷 そう思いますね。

大江 図書館の方はお金が無い、予算が減つているということばかりおつしやつているけれども、ちょっととした

工夫というのはそういうところのかもしませんね。菅谷 そうですね、何か戦略的な思考をするということがあまりないです。おそらく一番大事なのは、政策とどうか、自治体だと思うのです。すべてを牛耳つているので、市民の声もすごく大事ではありますけれど、市民の声よりは予算をどのように配分してもらうかというところだと思うので。

大江 現実には箱だけ作つてというところが多いから。菅谷 そうですね。日本の図書館の建物は最高に立派ですよね。

佐藤 その意味で箱がないと困る分野だと思うのだけれど、情報全般ということに関していうと、僕があの本を読んでももしろいと思ったのは、芝居や映画など、そういうしたものに対するコンタクトが図書館の仕事としてある。珍しい図書館だなと思ったんだけど、図書館というイメージとぜんぜん違つてきますね。

菅谷 そうですね。ただアメリカでは小さい図書館でも芸術支援というのはけつこうやつています。ビジネスとか芸術にはかなり力を入れています。あと楽譜が欲しいという人が多いですね。コーラスをやつている人つて全國でもすごく多いんですね。コーラスの楽譜というのはなかなか貸してもらえない。小平の図書館は地元の大

学と提携して図書館を通して借りられるなんですか
れども、普通はないので、そういう要望はけつこうあります。

佐藤 それもネットワークですよね、やはり。

菅谷 そうですね。だから自分が無いからできないのではなくて、無ければ橋渡しをすることをすればできると
いうことは多分あると思います。

佐藤 いろいろな機関があるから、そういうネットワー
クをうまく作り上げるという努力をすれば、ある程度の
部分は解決するのかな、簡単に考えれば。(笑)
菅谷 まあ、一〇〇分の一くらいは解決するかもしれません
いですね。

佐藤 学校図書館と公共図書館のネットワークの関係と
いうのはアメリカではどうですか。

菅谷 強いですね。一つ基本的には、図書館の司書の人の
仕事は館内にいることではなくて、外に出て行くことな
んです。これは多分アメリカと日本でかなり違うと思う
のです。どうして外に出て行くかというと、だいたい皆
さん、担当の分野があるんです。教育関係の人とか環境
関係の人とか。環境情報というのはアメリカにはかなり
あるのです。そういう中で学校の担当の人であれば、常
にその地域の学校の先生や教育関係者に話を聞いて、ど

ういう資料が必要であるかが、いつも仲良くしているの
でよく分かっているのです。先生もよく知っています。

ニューヨークの場合は十年くらい前から学校と図書館を
つなぐというプロジェクトをニューヨーク市がお金を出
してやっている。それなんかもその一つの例なのです。

日本でもいま調べ学習が多くなっていますが、ある時
突然子供たちが同じテーマで同じような本を欲しいと言
つて一気にやつて来て、図書館のほうとしてはすごく迷
惑だというんです。というのは宿題を出すと、みんな同
じように、例えばお米について調べて来てというと、学
校図書館は限られたリソースしかないの、公共図書館
にみんな行くらしいのです。そうするとその図書館人は
すべてに対応できないと言つて、すごく関係が悪化して
しまう。

でもニューヨークではそうした場合のファックス用紙
があつて、そこに何月何日にこういう宿題を出すから、
おそらくたくさん子どもたちが行くだろうからよろしく
お願いしますというお願いを数日前に出ておくのです。
そうすると図書館では準備をできますよね。だから同じ
本が無くても似たような本で対応するとか。これもちょ
つとした工夫なんですね。だからそういうぐあいにお
互いに持ちつ持たれつやつているのだけれども、日本の

場合はそうした工夫もなしに、公共の図書館の人が学校図書館をいきなり怒るというかような関係になってしまっている。もう少しなんとかならないのかなと思うことはあります。

例えば逆に言うと、図書館の司書の人は学校に行って、図書館にはどういう資料があつて、どういうふうに使えば、みんなの宿題の役に立つからと言って、その場で記入してもらつて図書館カードを教室の中で作るようになります。そうすると図書館に行つたことのない子でもとりあえずカードは持つてるので、それだけ行こうかなという気持ちが出来ますよね。だからそういうやり取りというのはしきりちゅう、どんな地域でもおそらく実行されていると思うのです。そういう交流をすることによって、学校図書館の資料はほんの一部ですから、それを公共図書館で利用しようという体制があるので、子どもたちは学校が終わるところまで図書館に行くという子もいるんですよ。

アメリカの図書館はけつこう騒いでもいいんですね。子どもセクションというのが離れた所にあるので、騒いでもそんなにほかの人の迷惑にならない。それでじゅうたん敷きか何かになつていて寝転んで本を読んだりとか。日本の人人が見たら怒るかもしれないんですけどそういうと

。

。

。

ころなのです。結局、図書館があまりにも敷居が高いとやつぱり来ないとと思うんですけど、子どもたちが来て楽しいような、だから変な話、コンピューターを使ってゲームなんかもできるんです。そんなに長くしたら怒られますけど。子守りというか宿題の面倒を見る。こうした宿題ヘルプというのも、ほとんどの図書館にあると思うんですけど、宿題の面倒を見てくれる担当者がいて、例えば先ほどのお米の宿題が出ましたというと、じゃあ、こういう文献に当たつてみたらと教えてもらえる。

佐藤 日本の図書館はかつては静肅に静肅についていう感じだった。

大江 日本でも小さい子ども用の場を持つてている図書館が、最近増えていますね。

菅谷 多くなりました。子どもサービスには力を入れているほうだと思います。

段塚 紙芝居などを持つてている図書館も多い。

菅谷 でも小学校高学年や中学生になるとなかなか来てもらえない。

大江 それがないわけだ。

菅谷 アメリカも以前はそうだったみたいですね。中学生になると図書館に来なくなつてしまつて、それをどうやって引き戻すかということで、いろいろ考えている。



菅谷明子先生（左）と大江代表幹事（右）

大江 大学と公共図書館の関係でいえば、例えば浦安
書館は明海大学。

菅谷 そうですね。

大江 それを多数やられると困るなあという側面はある
んです。

菅谷 そうなんですか。（笑）何が困るんですか。

大江 結局最初の話に戻るんだけど、一冊でいいってい
うこと。やっぱりこちらは基本的に図書館は揃えてほし
いわけです。

菅谷 ああ、そうか。

大江 だから一冊の本をすべての図書館・学校に揃えろ
というのは無理だし、それよりはもつと小さい図書館は
特徴をそれぞれ持ち合つていいと思うんですけど
も、例えば区なら区で、全体で二冊くらいはそろえてい
ていいのではないかということです。それが一冊に
なり、大学と提携して全体で一冊となるともつと困る。
菅谷 でも何で学術書が読まれなくなつた？ 長谷川一
さんが、まさに書かれていましたけど。

大江 それは本 자체の問題もあると思いますけれども、
学術書がなぜ読まれなくなつたかというのは、これは基

本的に大学における読書指導の問題が一番大きいと僕は思っています。いま小学校から高校まで、けつこう朝の読書運動やなにかで広がつてきているような気もするんですが、もともと、子どもは昔から本が好きだった。それが高校時代に読まなくなつて、大学に入つたらまたたく読まなくなる。そういう人たちはいま特に日本の大学の場合には強制力が無いですから、文献リストをあげて

ができるんですけど、入口に近いスペースは飲み食いオーケー、おしゃべりオーケーにしたらどうですかって言つたんです。そうじやないと来ないんですよ、みんなぜんぜん。あとは何かイベントをするとか。

大江 大学はそういう悩みを抱えていらっしゃる。図書館に来ればこういう役に立つことがあるんだよと、今そういうことが必要になつてゐるんでしょうね。

菅谷 そうですね。

だからそれぞの読書指導などが決定的に昔と比べて弱くなっているというか。昔は買って読んでいたわけです。だから多分読書とか学術研究書を読むということでは、二十年くらい前の大学一年生と今のマスターの一年生が、ほぼ同レベルだと言われている。大学に入つてから改めて読書指導というか。要するに同じレファレン

とを教えてくれたのが、今そういうものが無いから読む
機会がない。

菅谷 いろいろな大学の図書館から、図書館を改革するためなど、いろいろと呼ばれるんですけど、まず図書館に人が来ない、学生が来ないからどうしたらいでですかって言う。武蔵野にある大学の場合は今度、新しく図書館

菅谷 私はアメリカの大学院の時に、一番最初の授業で図書館の利用と文献を使っての論文の書き方を取らないと、卒業できなかつたのです。そういうことが単位に入つてゐるわけですね。二単位くらいでそんなに大きくはないんですけど、図書館利用教育も毎日ツアードやつてありますし、そういうのをもつと日本の大学でやつていく必要がありますよね。私も本当に人のことは言えないですけど、大学生の論文を見てちょっとあぜんとします。

大江 僕らは、本を読む楽しみを一八歳の子に与えてあげることがすごく大事だということを、ずっと思っています。教授側は押し付けたくないという気があるんですけど、そういうなくて本を読んでみておもしろかつたらしいし、役に立つたらしいし、勉強になつたらしいし、自分の考えをまとめるのに役に立つたらしいという

そういう経験を持たない人に本を読めと言つてもだめなんじやないか。

菅谷 でも逆の入り方もありますね。本を読むのがおもしろいと言われても、多分拒絕すると思うんです。でも学生は自分で好きなテーマがありますから、そのテーマに対してもうやつて調べたらおもしろいというような指導があれば、もうちょっと気持ちが動くんじやないかな。

大江 そうするとデータベースというのも、そういうところでどこかで使つてみるとどうか。

菅谷 べつにデータベースに限らず、本を読むのが楽しいということを單に頭から言つても、学生つて、あ、そりうですかくらいのことです。でも例えば、演劇にすごく興味がある人に、こういう演劇の本があるよ、みたいなのを具体的に教えてあげたりすると、結果は違うと思うのです。だからその人は別に本を読むことが目的ではなくて、演劇について知ることが目的になるわけです。だからやつぱり本は結局は手段ですよね。だから何かをするために本を読むわけです。特にそんなに本を読まない人に対しては、手段ばかり言つてもなかなか難しいと思うので。

佐藤 教養を身につけようとして読むのではなく、手段としての本を読む。

菅谷 本を読むということです。だから何かを知る、何かに寄つてゆく。これをやるとより良く知れる。例えば映画の好きな人だつたらこういうものとか。そういうた

方向に行つたほうが、もう少し身近なのではないか。

佐藤 あたりまえといつてしまえばあたりまえで、専門書でも理工系関係の人だと、その本を読まなければ自分の専門や研究が成り立たなくなる。人文系や芸術系の書籍だつてさまざまあるわけで、自分の目的や志向にそつてこういう本があるよというような方向に向かえば、本は読むんですよね。

菅谷 だからアメリカでは文献リストがすごくたくさんあるのです。もしこれに興味を持つたらこういう本と。最近は本だけでなくビデオとかウェブ・サイトとかありますけど、そうすると漠然と本を読もうというよりは、じゃ、こういうことから始めてみようかと。そういう種類を多様に用意しておくのも一つ。それは多分、図書館の仕事だと思うんですけど、そういうのがあつてもいい。

佐藤 自分が何をやつたらいいか分からぬといふ子が増えているという。（笑）

菅谷 そうでもないでしょう。例えば芸術系の大学に行つていれば、もちろん絵画・デザイン・音楽などに興味

があるわけですから。文学部みたいなところだと小説といつても多様すぎて難しいでしょうけど、ターゲットによつては方向はあると思います。

例えばアメリカはこれを読書振興でやつていますけど、ブック・ディスカッションというのがものすごくはやつているんです。それは何をやるかというと、著者に来てもらつて、参加者が同じ本を読んで、それについて皆で話し合うというのがはやりですね。学術的なものももちろんありますし、恋愛小説、ミステリーなどいろいろなのがあります。

本を読むというのは、これまで個人の行為だつたと思うのです。一人で活字と向き合つて本を読む。だから本をもう少し相対化するというか、人とのかかわりあいのメディアとして考えるために、例えば二〇人いると、同じ本を読んでもぜんぜん考え方は違います。そこで気付きあつたり学びあつたりするというのがすごくはやつていて、これは本屋でもやつています。 Barnes & Nobleとか、ああいうところは必ずやつています。紀伊國屋さんみたいな全国にある大きな店です。あと図書館でもよくやつています。今日やつたから明日どうなるというわけではないと思いますけど、そういうことを地道に、いろいろな種をまいてやつていくのがいいんじゃないかな

な。

大江 大学でもそういう授業をやつてている人がいますね。同じ本、手軽な本、中身は何でもいいんですけど、クラス全員、同じ本を同じ時期に読ませて、電車の中で読める本というふうなことで工夫しているみたいなんです。あるいは授業が始まる前の十分間で、とにかく同じ本を読ませて、それで議論するというのも何回か重ねる。

菅谷 大学の授業でやるのもいいと思うんですけど、やはり先生や成績などいろいろしがらみがありますよね。だから図書館というのは逆に人を集めるのはけつこう大変ですけど、なんていうか楽しさがないと、授業で一〇分間でやるというとその先生がいなくなると、要するに自主性がないとすごく難しいことだと思うのです。もちろんきつかけにはなると思うんですけど。

大江 図書館や書店などで、例えばトーク・セッションや講演、そういうことも非常にいいと思うんですけど、学生に授業とかかわらせる。これは考えが違うと思うんですけど、学生全般を見ていると、けつこう強制力というのはきつかけとして悪いことではない。それがぜんぜん無ければいつまでたつても、関心のある人はいろいろなところに行くけれど、そうでない人はぜんぜんチャンスがないのではないか。

菅谷 両方が大事なのかもしれないですね。

多様化する図書館

佐藤 その仕掛けが、また必要になってくる。

菅谷 そうだと思いますね。アメリカでは、図書館に来てもらうためにものすごくいろいろな仕掛けを作つています。本屋さんでも。ただ逆に、アメリカ人は日本人に比べるとぜんぜん本を読まないと思いますし、アメリカの出版界も順調だとはもちろん言えないと思うんですけど、やっぱりすごい仕掛けはしていますよね。

あともう一つはちょっといまの話と違うかもしれないけど、やっぱり個性的な本屋さんが多いので、コミュニティができているんですね。だいたい小さい本屋さんでも、本屋さんに行くと隣にカフェみたいなのがある。例えば私がワシントンにいた時にすごく気にいったのは、政治関係の本が置いてあって、ちょっとリベラルな若者が集まるような本屋さんなのです。そこに行くと、うちにはバーンズ＆ノーブルのような薄利多売というか、ディスカウントしていない、アメリカだとディスカウントしているので半額の本屋さんはけつこうあるんですけど、うちも定価で売っているのだ。だけどちは皆さんのコミュニティを守るためにがんばっているんだと書いてあ

る。ここに店主さんががんばっているんだから、ちょっと高いけどここで買おう、そういう人が集まつて来るよう、いわゆるサロンみたいなところがそれなりにあるのです。

そういうことがあまり目に見えないから、学術書は別ですけど、日本の本屋さんはどこに行つても同じような感じで、あるものはあるけど無いものはまったく無いという感じです。これもちょっと学術書と違うのですが、私はいつも思うんですけど、単行本はそうでもないですけれど、文庫本ですべて出版社別になつていますよね。

私は紀伊國屋さんが好きでよく新宿南口のほうに行くんですけど、一応、端末で検索するコーナーがありますよね。でもやっぱり面倒臭いかな。書店さんも各フロアに端末を置いてくれるとありがたいですね。いろいろな人に聞くのですけど、カウンターでこの本を探してますと言つてくる人は、探している人の一割にもならないと思うんです。みんな、ああ無いなつていうことで帰つてしまふ。そういうのがなぜなんだろうと、ちょっと不思議な気がするんです。

佐藤 ですからインターネットの伸びがここ数年すごい。菅谷 私は逆にアマゾンで調べて、アマゾンで買う時もありますけど、本屋さんでいろいろなを見たい時もあ

れば、アマゾンを見て、全部出版社別に書き直し、買うということがよくあります。

佐藤 アメリカの図書館における、本の選択はどういう形で行われていますか。

菅谷 これは日本と相当違うらしいです。大きな図書館は別ですけど、普通はニューヨーク公共図書館みたいに大きくなりと、リクエストされたものをアマゾンで買っているというところもあるらしいですね、最近。彼らが言うには、誰が使うか分からぬものを先に買ってしまって、つまり図書館員の判断で買つてしまつて、結局一回も貸し出されない。日本でもたくさんありますよね。そんなのは税金の無駄使いなので、リクエストのあったもの。アマゾンだとすぐに配達してもらえるので、アマゾンを使って購入しているところがけつこう多いという話です。

あと日本だとかなりの数の出版社が東京に集まっています、その流通もいいので、例えば浦安図書館で見学するところ、この二週間くらいに日本で出版された本が全部棚にとりえず来て、そこから選ぶようなことをおつしやっていますけど、アメリカは全国各地にいろいろな出版社があるわけです。大学のプレスもかなりの数がいたるところにあります。だから物理的に一ヵ所に集めてという

のは、すごく難しいことなのです。集めた中から選ぶというよりは、リクエストに応じていくというか、カタログで探すところなどがけつこう多いと思います。

大江 もともと、そういうじゃない、日本も。

菅谷 だから逆に言うと、図書館によって置いている本もずいぶん違うというのは、そういうこともあると思います。

大江 昔から自分で選んでいるということ。今おっしゃったように読者のリクエストかも分からぬけど、図書館員が何を購入するかというのを自分たちで決めている。

菅谷 そうですね。だからTRCみたいなところが全部決めてしまうというよりは、地域性もかなり。日本よりも多分、多岐にわたっていると思うので。

佐藤 さて、時間も迫ってきました。最後に、日本の図書館とアメリカの図書館の決定的な違いというと。

菅谷 やはり情報を編集しているか、いないか。それが一番違うと思いますね。

佐藤 編集といいますまで先生がお話しになつたこと全般のようにも思えますか？

菅谷 編集というのは、一つにはどういう情報とどういう情報をあわせていくと、より価値があるかということだと思います。例えば棚の例で言うと、コーナーを作る

というのも一つの編集作業だと思うのです。おそらく本

屋さんでも、イラク戦争とかが起こると、今までバラバラにあつたところのものを一ヵ所に持つて来て、同じテーマのものを出すことによって人目を引いて、興味を抱く人が手に取りやすくしようとすると思うのです。例え

ばそういうことです。さつき申し上げたような、例えばビジネス関係のものだつたらそれをまとめてみるとか、あるいはこういうことを探している人に対してもこうい

う情報源がありますよというふうに、いろいろな情報をつないでいくことによって情報の価値を高めていく。そういう編集作業というのが多分ぜんぜん日本と違うのです。だから情報提供の積極的な姿勢というか、そういうところが一番違うのです。

菅谷 それがちょっとした工夫だということですよね。

佐藤 もとに戻つてしまふけど、そうするとやはりスタッフですよね。司書と一般的に言うけれども、司書にもさまざまあつて。

菅谷 そうですね、だからシニアライブラリアンとか、ジュニアとか、いわゆる格付けはあります。同じ司書はいないです。上級司書とか準司書みたいな感じで、逆に言うと、それによつて一生懸命やれば上に上がれるとい

う、そういうのがアメリカにはありますね。

佐藤 例えば分野的には、書籍で言えばこういう分野とか。

菅谷 ありますよ。教育司書、医療司書、ビジネス司書、人文社会関係の司書とか。

佐藤 芸術関係もいたり。

菅谷 芸術もいます。環境とか地域情報とか。

佐藤 そのスタッフの養成などは。

菅谷 一番違うのは、日本の場合は学部レベルで大学の

司書単位を取ると司書になれるんです。でも、アメリカの場合は大学院なのです。大学院で情報科学とか図書館学を勉強して、それで司書の資格を取る。簡単な例で言うと学士か修士かという違いが一つと、いわゆる内容ですけど、すごく情報寄りなのです。だから最近だと、どうやつてホームページを作るか、データベースをどう構築するかとか技術的なこともやりますし、メディアとかコミュニケーションみたいな勉強もするので、単に図書館の学というよりは情報科学なのです。だからインフォメーション・サイエンスなので、情報と図書の違いが顕著なのです。日本は書籍重視だけどアメリカの場合は情報なので、どういうメディアにものが乗つかつていてかは別として、映像もビジネス情報もデジタル情報もあ

るというようなことがかなり違うのではないですかね。

あとアメリカの大学はどこもそうなのですが、外に行つて研修する課程が組み込まれているのです。だからより実践的な部分もあるのです。だから図書館に就職して、司書の資格を持つていなかつたから大学院に通つて、そこで司書の資格を取るという人もいる。より高度で実践的な内容ということが言えると思います。



段塚図書館委員

それと、これはアメリカで一般的なんんですけど、二つの専門を持つている人がけつこう多いです。だから芸術と図書館司書とか、医療関係のことと図書館司書とか、

学部内でも理数系を専攻して美術関係の単位を取るとか、そういう人は一般的にすごく多い。そういう流れで図書館でも同じようなデュアル・ディグリー、二つ学位を持つていると言うんですけど、そういう人がいれば、余計ビジネスも分かつていて図書館司書の資格も持つていれば、ビジネスライブラリアンの働きをするというのもありますね。

大江 日本ではそういうことは。

菅谷 そういう人はいないわけではないけれど、あまりいないですね。多分ライブラリアンというのが、専門職として認識されていると思うのです。だから歯医者とか弁護士とか、もちろんレベルはぜんぜん違うからライブラリアンとしての社会的なステータスはそんなに高くなっていますけど、でも一応専門的な技能を持っているから図書館で司書として働けるのです。多分日本だと、学芸員というと分かる人がいますけど、一般に司書というとけつこう分からない人もいらっしゃる。

佐藤 確かに美術館の学芸員の方、博物館の学芸員の方がいろいろいらっしゃる。日本の場合はどういうところ

で資格をとるのですか。

菅谷 やっぱり大学で単位を取るんですかね。それで資格試験?

大江 学芸員も試験を受けるんですか。

菅谷 そうだと思います。玉川大学とかは学芸員でけつこう有名かもしだれない。

段塚 定かではありませんが、出版社を受ける人は、学芸員資格を持った人がけつこう多いような気がします。

菅谷 ああ、そうですか。

大江 就職はなかなか大変なんですか?

菅谷 やっぱり就職で言うと、学部卒業する方で学芸員とか図書館員になりたい人ってすごく多いのです。でも結局その採用が直接でないので、例えば区役所や市役所に入つても、自分は水道課とか土木課に回されるかもしれないということになると、なかなか受験できないといふことで、全国にかなりの数で毎年司書の資格を取られる方がいらっしゃるそうですけど、就職したいけどほとんど図書館に就職できないのです。そういう水道課の人が配属で図書館に行つていて、早く配置替えにならないかなと待つていてみたまう、すごく不幸なことがあります。

段塚 ミスマッチな。

菅谷 ええ、不幸なんです。

佐藤 アメリカの場合はライブラリーとミュージアムといふものの感覚の違ひみたいなものは。

菅谷 ゼンゼン違います。ライブラリーとミュージアムは違います。ミュージアムはアメリカの場合はNPOが多いのです。だから自治体のやつていてるミュージアムはほとんどありません。というのはもともとがアメリカはプライベートなミュージアムが公共的な役割を持つているというのが多いのです。だからニューヨーク公共図書館もいわゆるNPOが運営していますけどミュージアムにすごく近くて、例えばニューヨークにメトロポリタンというすごい巨大なミュージアムがありますけど、あれもNPOです。ほとんどNPOです。でもライブラリーでNPOというのはほとんど無いので、そういう意味ではミュージアムとはちょっと違います。昔の富豪がプライベートなものを開放したというのがどちらかと言うとミュージアムなんです。

佐藤 もともとミュージアムというのはそういう歴史を持つていますよね。

菅谷 そうですね。ただ、もちろんヨーロッパになるとまたぜんぜん違います。

つてきましたが、先生が出版社に望むようなことはありますか。

菅谷 出版社ですか。うーん、やっぱり私がいつも思うのは、ニーズの把握というのをどうしているのか。もちろん商品と違うので、いわゆるコンシューマー・プロダクトではないので、ニーズに対しても接しているのかどうか分からないですけど、何が社会の役に立つてどうなのかなと。意外に少数の人の頭で考えたものを出していくという出版社の方法はすごく特異だと思うのです。例えば食べ物や物だつたら、必ずマーケット・リサーチをして、市場のニーズがどんなふうになつていて、今の時代がこうだからこういうものが出る。でも出版社って、例えばヒットした本を出したとしても、たまたま当たつてびっくりしましたみたいな感じで、社会とのつながりが実はあまり無いんじゃないかなという気がするんです。例えば大学生が本を読まなかつたりつまらないと思うのはどうしてなんだろうかという、実際の生の声を聞くとかというようなワークショップみたいなのを、もつとやつてみると、あつてもいいんじゃないかなというのを常日頃から感じます。

佐藤 出版社も図書館との関係で言えば、本を買つてもうとすることだけでなく、何らかの接点を持ちうる

のかどうか。

菅谷 さつきの利用者教育じゃないんですけど、読書、情報活用能力と言ったほうがいいと思うんですけど、そういうこと。論文書き方指導ではないんですけど、そういうことを例えれば大学のカリキュラムの中に入れて、これを単位で取らないと卒業できないようなことをするためのロビー活動ではないんですけど、そういうことはいま大学の中でも受け入れやすい状態です。というのは今の中は本当にひどい状態なので、そういうことをやつていくことが必要なのではないかという気がします。

大江 それは大学でそういうことを考えている人がいっぱいいるからですか。

菅谷 そうですよね。大江さんのところなんかぜひ実現させて欲しい。

大江 ちょっと話は変わりますが、ずっと最初のほうでおっしゃったビジネスのところで、求人広告というのは新聞に入つてているチラシのことですね。

菅谷 そうです。

大江 ああいうものは集めてれば、バラバラではあまり意味が無いけれど、いくつか集まつていればそれなりに利用価値が出てくるという話がありました。

菅谷 そうですね。だから例えば五紙に全部同じのが入

るとは限らないですよね。そうすると違ったものが見られるというメリットもあるし、逆の使い方もあるって、例によつて広告を出そつかどうか決めるといつともできると思うのです。だからいろいろな使い方ができる。

段塚 ちょっととした工夫というのは、そういうところなんですね。

菅谷 そうですね。あと学術書つて、公共図書館では隅に追いやられていることが多いですね。例えはそれをコーナーに出して、こういうふうに使って、私はこんなふうに利用しましたみたいな例を出していくとぜんぜん違うと思うのです。スーパーもそうですが、コーナーで前に出して陳列をすると売れ行きがぜんぜん違うと言いますよね。それと一緒でそういう学術書なんかも、こんなふうに使ってこうやればこういう良さがありますみたいたのを、もっとアピールしてもらうようなものがあるとまた違つて来る。並べるだけではなく。

大江 郷土本というのだけは集めたりしていますね。

菅谷 そうですね。でもほとんど誰も見てないですよね。あの一角は。

佐藤 ちょっと余談ですが、先日、神田神保町の岩波

ブックセンターというところで白水社のフェアをやつたんです。その時に鹿島さんという人を呼んだんだけど。

菅谷 鹿島茂さんですか。

佐藤 そうです。私の神保町活用術という彼の専門はフランス文学だけれど、それとはあまり関係無いような講演をしてもらつて、けつこう人が集まりましたね。

菅谷 そうでしょうね。おもしろそうですね。

佐藤 神保町について知らなかつたことがいつぱいあって、町の活性化を考えて本屋さんに何ができるかとか、出版社が何ができるか。そういう方向でできることがあるとおもしろい。

菅谷 そういうのももつとあるといいのかな。声を拾つていくというのはけつこう参考になることが多いと思うんです。私は講演会に呼ばれてかつちり講演やつて下さいと言われない時は、逆にワークショップで、来た人に意見を出してもらつて、それをまとめるようなことをやつてもらうと、自分で知つてゐるつもりでもぜんぜんおもしろい意見が出て来る。例えは五〇人会場にいれば、講演会で一人の先生が来て話すと一人の知恵しかないわけですが、五〇人参加してもらえば五一人の知恵が出てくるわけですよね。だからそういうのをもつとやつていつてもいいんじゃないかなという氣がするんです。

大学生は大学生で例え本を読まないかもしれないけれど、何か本に対しても思つてゐることが多分いろいろあると思うのです。だからそういうのが何なのかというのを、予想している部分があると思うんですけど、でも意外と聞いてみるとちょっと違つてゐる部分というのもあると思うのです。だからそういう機会を作つていくといふことをやつていく。でも地道な努力は必要だと思うんですけど、そういうことをしていかないとなかなか今の流れは変わらないんじやないかなという気がします。本を読むというのは労力が必要だから、情熱がないとなかなか。

佐藤 時間も取りますしね。

（終り）

菅谷 そうですよね。

佐藤 今日は、本当にありがとうございました。アメリカの図書館、日本の図書館、その本の考え方など、その他、学生の話から本を読まない話など、いろいろ話があちこちにとびましてまとまりのある司会がうまくできませんでした。こちらの用意不足で先生も大変でしたでしようが、今後も図書館や本をとりまく環境についてお教いいただけるとありがたく思います。

菅谷

いいえ、こちらこそ時間不足で大変失礼致しました。

（終り）

●わが社の一冊*未来社

●わが社の一冊*吉川弘文館

表象の光学

透視法
表象/主体の
擁護する

『表象の光学』

小林康夫著

初版二〇〇三年七月刊
A5判・三一八頁

本体二八〇〇円

(定価二九四〇円)



『20世紀日本の歴史学』

20世紀日本の歴史学

永原慶二



『20世紀日本の歴史学』

永原慶二著

初版二〇〇三年三月刊
四六判・四〇〇頁

本体三三〇〇円

(定価三三六〇円)

九〇年代半ばにベストセラーとなつた『知の技』シリーズの編者として名を馳せた小林康夫氏が、『表象文化論』といふ彼本来のフィールドで本領をぞんぶんに發揮したのが本書です。デカルトからはじまり、ペラスケス、マネ、マラルメを通過して、デュシャン、ブルトン、

リルケ、ツエラン、ブランショ、デュラスへ。西欧近代の哲学・文学・美術・音楽の諸領域を踏査し、『光学』をキーワードに、表象装置・主体・実存・物語の問いを捉え返します。まさに『表象文化論』のハードコア。企

画当初からじつに十三年がかりの本書は、華麗な文体とともに、切れ味鋭く、美しい一冊に仕上がつたと自負しております。戸田ツトム氏が、表紙のみならず本文レイアウト・組版も手掛けました。黑白のコントラストの際だつ装幀、極細の野線で縁取られた紙面。『光学』の名を冠する一冊にふさわしく、鋭利な光を放つています。

本年七月に逝去された著者の、「『現在』をきびしく受けとめる『批判』精神を堅持」してきた重みを実感させる記述に、誰もが胸を打たれることでしよう。

なお、巻末には、今井修氏による「近現代日本史学史年表」が付載されています。代表的歴史書の刊行年度、編著者が明記されていて、出版人必読です。

市民と武装

（アメリカ合衆

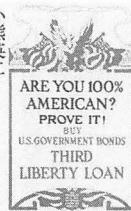
『市民と武装—アメリカ合衆
国における戦争と銃規制』

小熊英二著

初版二〇〇四年七月刊

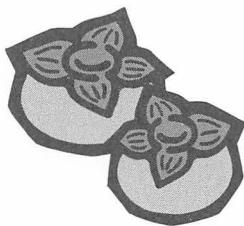
四六判・一八四頁
本体一七〇〇円

（定価一七八五円）



本書は小熊英二氏が書いた二本のアメリカ論を収録したものである。未発表論文「普遍という名のナショナリズム」は著者の処女作であり、いわゆる日本人論三部作『單一民族神話の起源』『日本人』の境界』『民主と愛国』で展開されるテーマ、国家統合思想やナショナリズム論の萌芽がこの論文に含まれている。また、「市民と武装」は著者が東京大学大学院在籍中に専攻誌『相関社会科学』に発表。両論文とも一〇年以上前に書かれた論文だが、今日の世界情勢を鑑みても古さを感じない。むしろタイムリーなものとして読めるのは、両論文が「アメリカ」という国家の成り立ちは本質を突いているからにほかならない。

一貫して日本とは何か、日本人とは誰か、を問い合わせ続けてきた鋭い論客がアメリカという新たな〈帝国〉の本質を鮮やかに解き明かす必読の一冊である。



人文会二〇〇四年春季セット店訪問報告

札幌・小樽方面

報告 華園斉（創元社）

- 期日——七月一日（木）～七月二日（金）
- 参加メンバー——藤代（平凡社）・田崎（みすず書房）・原田（未來社）・華園（創元社）
- 訪問書店——三省堂書店大丸札幌店・紀伊國屋書店札幌本店・旭屋書店札幌店・北大生協クラーク店・コーチャンフオーメシが丘店・丸善南一条店・リープルなにわ・紀伊國屋書店札幌ロフト店・喜久屋書店小樽店（計九店舗）

店し、大きく書店地図が変わった札幌市。そこに、この秋には市内南部にコーチャンフオーメシが、来春には紀伊國屋書店がそれぞれ一〇〇〇坪を超える超大型店の出店を決め、また書店地図が大きく変わろうとしています。

まずは二つの出店の話から。来春の札幌駅前店（仮称）は一～二Fの一三〇〇坪。札幌駅隣の建設現場を見て、この地区の競争の激化を予感しました。専門書の強化、イベントスペースの充実、そして地元北海道の本に力を入れることなど、その構想の一部をお聞きしました。コーチャンフオーメシが丘店は「お客様に『ステータス』を感じてもらいたい」という言葉どおりゆつたりした店内と高級感のある什器、丁寧な接客を掲げ、さらにミスターDオーナーとCDなどの商材の複合もあわせて札幌市南部の郊外にミュンヘン大橋店を今秋出店。

この二つの出店には、既存の書店からは戸惑いと不安の声が聞かれましたが、かえって自信あり、と迎えつ

構えの書店様もありました。その自信は、お客さまから
の信頼の厚さゆえでしょ。札幌駅前地区と大通地区、
そして郊外と超大型店が揃うなか、その信頼を作ること
が一番求められるのかもしれません。それは昨夏小樽市
に出店した超大型店喜久屋書店が、地元に溶け込もうと
している姿勢からも感じたことです。

最後になりましたが、今回一番印象的だったのは、ご
担当者の素晴らしい熱意です。各店とも常にお客さまの
ための品揃え、構成を目指している姿が、棚を見てもお
話を聞いてもよくわかりました。そして、この熱意に触
れ、人文会としても一層この地の書店様と深くつながっ
ていただきたいと、思いをあらたにしました。

静岡・名古屋方面

報告 平石 修（御茶の水書房）

- 期日——七月一日（金）～三日（土）
- 参加メンバー——平石（御茶の水書房）・段塚（紀伊國屋書店）・島田（晶文社）・江波戸（日本評論社）
- 訪問書店——戸田書店静岡本店・谷島屋呉服町本店・

丸善新静岡センター店・三省堂書店名古屋高島屋店・
三省堂書店名古屋テルミナ店・ジュンク堂書店名古屋
店・マナハウス・丸善名古屋栄店・紀伊國屋書店ロフト
名古屋店・三洋堂書店本店・名古屋大学生協南部
店・ちくさ正文館・ウニタ書店（計一三店）

● 感想：九〇〇、三三〇、三〇〇、今回訪問した静岡駅
前の三書店のそれぞれの書店の坪数です。合計で一五三
〇坪、このほかに今回訪問しない書店を入れると全部で
二〇〇〇坪ぐらいにはなるのではないでしょか。
名古屋地区を見てみましょう。五五〇、二四〇、三〇
〇、六〇〇、四五〇、五五〇、二〇〇、八〇、一一〇、
三〇、合計で三一一〇坪になります。一書店平均三一一
坪です。昔の基準でいけば大型書店の坪数です。しかし
今や一〇〇〇坪や一五〇〇坪の書店もめずらしいとい
う感じがしないほど、書店は大型化してきています。かつ
て「大きいことはいいことだ」というバブルの時代があ
りました。そして今、世の中はその時代の不良債権処理
におわれています。今の出版界が、一周遅れのトップラ
ンナーでないことを祈ります。

悲観的なことばかり書きましたが、うつわが大きくな

れば、今まで書店の店頭になかなか展示されなかつた小部数の書籍が並ぶというメリットもあります。また、棚スペースが確保されれば、他の書店に無い本をそろえて売ろうとする書店員さんも現れきました。

名古屋の書店の方々との懇親会で、古書市を開いたり、

落語の会を設けたり、イベントをとおしてお客さんを呼び込む努力をしていなればお客さんは増えない、との言葉には思わず正座をして聞き入つてしましました。ガ

ンバレ名古屋！ オレがついている（関係ないか）。

京都・大阪方面

報告 馬場正彦（吉川弘文館）

●期日——六月二八日（月）～六月二九日（火）

●参加メンバー——古川（青木書店）・小林（慶應義塾大学出版会）・古賀（勁草書房）・大江（東京大学出版会）・馬場（吉川弘文館）

●訪問書店——ブックファースト京都店・丸善京都河原町店・大垣書店烏丸三条店・京都大学生協ルネ店・旭

●感想：ご当地は、人文会にとつて最重要地域のひとつで、毎年のグルーブ訪問では欠かさず訪れていました。それだけに人文書ご担当者様は頗るなじみの方も多く、安心して販売をお願いできます。

そんな、ある意味、馴れ合いになりがちな京都・大阪ですが、今年は二店の新規店を訪問することになりました。田村書店千里中央店とブックファースト梅田店です。それぞれ、五〇〇坪クラスのお店で、現在の感覚では超大型店とは言えませんが人文書の棚作りに真剣に取り組んでおられます。今後も引き続き「専門書がある店」として読者にアピールしてもらいたいものです。

また、京都では新京極の映画館建て替えに伴う新規店出店の噂を聞きました。一度は退店を余儀なくされたナショナル・チエーンのようです。人文書をどの程度、置かれるのか現時点では不明ですが、京都の書店地図に影

屋書店京都店・アバンティブックセンター・ジュンク堂書店京都店・田村書店千里中央店・旭屋書店本店・ブックファースト梅田店・紀伊國屋書店梅田本店・ジュンク堂書店大阪本店・ジュンク堂書店天満橋店・ジュンク堂書店難波店（計一四店舗）

響が出るのは必至でしょう。

前回訪問時より、棚の工夫がなされているなど思ったのが、旭屋書店本店です。人文書売り場に専門雑誌（歴史なら「歴史学研究」や「日本歴史」）を面陳されるのです。聞けば、数年前に一般書中心の店にしたのだが、売り上げは落ちてしまつた、そこでかつてのような専門書重視の店作りに戻しているとのこと。

確かに、大型店にとつては、単価の高い専門書を購入する読者を取り込むことこそが、売り上げをアップさせる方法なのではないでしょうか。固定客をつかめば、確実に売り上げをキープできる人文書を、ご当地の各お店では今後も大切にしていただきたいと思います。

広島・山陰方面

報告 大和定幸（大月書店）

- 期日——六月二五日（金）～二六日（土）
- 参加メンバー——新保（誠信書房）・浴野（草思社）・成田（法政大学出版局）・大和（大月書店）
- 訪問書店——フタバ図書テラ店・ジュンク堂書店広島

店・紀伊國屋書店広島店・今井書店グループセンター店・本の学校今井ブックセンター店（計五店舗）

●感想：今回の特設店訪問は、初日広島に入り翌日バスで三時間かけて松江に入るコースに参加しました。このコースの中には、この一年近くにオープンした（今井書店グループセンター店・二〇〇三年三月、フタバ図書テラ店・二〇〇四年三月）二書店があり、参加メンバーのほとんどは初めての訪問になりました。

メンバーはフタバ図書テラ店に集合し、研修がスタートしました。JR広島駅から山陽本線で一駅「天神川駅」下車、そこから徒歩四分。広島駅からは、車で一〇分程度の距離。駐車場四三〇〇台収容の中四国最大のショッピングセンター「ダイヤモンドシティ・ソレイユ」の三階にあります。書籍売場は七五〇坪。世良社長や各担当の方々から概況をお聞きしながら、版元からも棚の流れ、分類方法など率直にお話させていただきました。オープン三ヶ月、まだまだ手直しの必要をフタバさん自身が感じ、今まで以上の店づくり目指す姿勢にはおおいに期待が持てました。その後、ジュンク堂書店広島店、紀伊國屋書店広島店のお店を見学させていただきました。

翌日の今井書店グループセンター店は、JR松江駅から車で一〇分程度。近くには小・中・高・短大などがあり、来年には市立病院が移転して来るとの事。立地は比較的恵まれているように思いました。またこちらの店は、グループ全体に情報を発信する拠点と位置づけ、売れ筋やロングセラーを発見して、グループ店に伝達しているとの事でした。次にJRで米子に向かい、本の学校今井ブックセンター店にお邪魔いたしました。外観や入り口付近の印刷機など、やはり山陰の文化の香りを強く感じました。米子市は人口一四・九万人、県全体では六一・七万人と全国で一番少ないなど、悪い条件のなかで色々なフェアなどで読者開拓を進めている努力には、感心いたしました。

最後に、貴重なお時間を割いてお付き合いしていただきました書店の皆様、大変お世話になりました。

福岡・北九州方面

報告 鎌内宣行（春秋社）

●期日——七月一二日（月）～一三日（火）

●参加メンバー——鎌内（春秋社）・杉田（ミネルヴァ

書房）・佐藤（白水社）・平川（筑摩書房）

●訪問書店——紀伊國屋書店福岡本店・紀伊國屋書店福岡天神店・丸善福岡ビル店・ジュンク堂書店福岡店・

フタバ図書TERA福岡東店・紀伊國屋書店久留米店・クエスト小倉店・喜久屋書店小倉店（計八店）

●感想：今回は特に昨年の訪問時以降オーブンした新店舗の感想から。

まずは、喜久屋書店小倉店。ここは以前、紀伊國屋書店小倉店が入店していた旧そごうを伊勢丹が引き継いだところ。二月オープンでまだまだ認知度が低い。しかし、訪問社一同店内レイアウト、品揃えについては、クエスト小倉店と比較しても劣らないとの感想。期待感を持ちました。

紀伊國屋書店久留米店は西鉄久留米駅からタクシーで一五分。九州に数店舗を展開する「ゆめタウン」2Fに昨年九月のオープン。完全な郊外型ショッピングセンターで紀伊國屋書店の立地としては異例の店。読者層が限定されることもあり、店長も販売分析から品揃えの工夫など試行錯誤の様子。これらの同様立地に紀伊國屋出

店の鍵を握る店。人文書はこれからでしょうか。

フタバ図書TERA福岡東店は福岡空港駅からタクシ

ーで一五分。ここもダイヤモンドシティ（イオン系列）2Fの郊外型。七月一日オープン時は天神地区から人波が消えた？ とかで、訪問時も平日にかかわらずの賑わい。人文書品揃えもフタバさんの意気込みを感じました。

ここも時間はかかるでしょうが天神戦争に参戦の資格がありそうです。

最後にその天神地区ですが、リブロ撤退後もジュンク

叢書アレティア 仲正昌樹編

①脱構築のポリティクス

- ①「無限の正義」のアボリア伸正昌樹
②四つの差延と脱構築の正義藤本一勇
③世界化時代のプロフェッショナル小森謙一郎
④危うくも断絶の痕跡を帯びた「我々の間」の方途西山雄二
⑤もう一つの民主主義澤里岳史
⑥公共性論からみた責任倫理の可能性内藤義子
⑦性暴力と売買春の狭間から菊地夏野
⑧黒衣の女性たちのポリティクス・コネル
●2310円

②美のポリティクス

- ①「美に内在する」政治：複数技術時代における「殊外」と解説の弁証法仲正昌樹
②（アレティア論）の季節・形式主義者たちの1920～30年代日本北出暁
③牛嶽世界の廢構ワーゲン・ショターナー
④表現における不在の契機高安啓介
⑤分裂病（と）時代古野拓
⑥「迷妄の教え」：シユミット、ヴァーグナー、ガント竹峰義和
⑦表面のメメント原和之
⑧宗高と美の父爻共同体藤本一勇
⑨ロマン主義の弁証法ヨッヘン・ヘーリッシュ
●2940円

③法の他者

- ①法に取り憑く「他者」仲正昌樹
②正義と権力闇良徳
③「理」の系譜学
④慎改康之
⑤他者指向の自由主義
⑥社会・音楽美枝
⑦リバタリアニズムと同性婚に向けての論議橋本祐子
⑧多元的社会の実現のためには堅田研一
⑨差延の時代における普遍性澤里岳史
⑩差延のポリティクス藤本一勇
⑪レイ・アルチュセールの政治思想におけるマキアヴェリの契機大中一彌
⑫拒绝と権利西山雄二
⑬人種主義のポリティクス・ポール・ギロイ
●2940円

④差異化する正義

- ①共同体と「心」仲正昌樹
②コモンの現前と間隔化権安理
③父権制の脱構築小森謙一郎
④抵抗する母性村田泰子
⑤森崎和江の言論の喚起するもの高原幸子
⑥女同士の親密な関係と一つの「同性愛」赤枝香奈子
⑦排除・抵抗のレトリック堤江有里
⑧沈黙と女性菊地夏野
⑨ボストンコロニア的な差異：文化的正当化における教訓イ・ショウ（周備）
⑩フランスにおける都市底辺層の生き抜き戦略船篠奈々子
⑪カギとしての言語ヨアヒム・ボルンナビルギート・ハーゼンヴァルター・シュルツ
●2940円

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
TEL 03-5684-0751 FAX 03-5684-0753
<http://homepage1.nifty.com/ochanomizu-shobo/>

堂書店の優位は変わらず、人文書は順調な伸びとのこと。

博多駅の紀伊國屋書店福岡天神店と当分暑い戦いは続きそうです。

紀伊國屋書店福岡天神店と当分暑い戦いは続きそうです。
また、来年二月に天神地区西側に地下鉄七隈線が開通し、天神へのアクセスが便利になるとのことです。

今回の訪問では短い時間でしたが紀伊國屋書店様はじめ各書店様に貴重なご意見をいただき本当に有り難うございました。来年もこの地区は会として必ず訪問しなければとあらためて感じています。

「委員会活動方針」

ことができればと思っています。各委員の皆様のご協力を
をお願いいたします。

〈企画グループ〉：紀伊國屋書店様との欠本補充プロ
グラムを軌道に乗せ、自動補充時代の有効的な売れ筋欠
本補充の仕組を確立したいと考えています。

販売委員会

販売委員会委員長 沼野英生

委員会がグループ制になつて二年目になります。販売
委員会は企画・研修・図書館の三グループで構成されて
います。今年度はそのグループ制を生かした委員会活動
を行ないたいと考えています。

まずは、グループにとらわれずにテーマにより委員会
内で横断的に自由参加できるような環境作りをします。
そのため各グループのメール連絡は販売委員会全員に
送り、それによって販売委員会内の他グループの動向を
把握し、自由な意見交換や参加を促します。

さらに、特定の個人・グループに仕事が偏らないよう
役割を分担して行ないたいと思います。
そうすることによって、販売委員会の「人文書を売
る」という根本のテーマを委員全員で強く意識していく

〈図書館グループ〉：図書館見学をはじめ書店外商・
取次・TRC様との積極的な情報交換を行い、販売促進
に繋げられればと考えています。

新委員会のメンバーは次の通りです。

企画グループ

○沼野英生（草思社）

○田崎洋幸（みすず書房）

西谷能英（未來社）

華園斎（創元社）

小林丈生（慶應義塾大学出版会）

研修グループ

○吉武創（勁草書房）

○大和定幸（大月書店）

○古川清（青木書店）

図書館グループ

○杉田啓三（ミネルヴァ書房）

段塚省吾（紀伊國屋書店）

馬場正彦（吉川弘文館）

（○委員長／○副委員長）

弘報委員会

弘報委員会委員長 鎌内宣行

本期の弘報委員会は広報活動をより積極的に行なうために人数を一名増員し、さらにメンバーもがらりと入れ替えたフレッシュな顔ぶれでの出発です。前委員会の活動を継承しながらも新しい視点で活動が出来ればと考えています。

『人文会ニュース』の発行（弘報グループ担当）とホームページの管理運営（ホームページグループ担当）が活動の二本柱ですが、その他弘報全般を受け持ちます。『人文会ニュース』は年三回発行を目指し、会活動の報告はもちろん「人文ジャンルを一五分で読むシリーズ」の継続。書店や図書館の現場の方々に登場していたとき人文書の現状などを報告していただくシリーズなど皆様に役立つ記事を積極的に掲載したいと思っています。

ホームページについては課題であつた人文書基本図書

『人文書のすすめⅢ』掲載分）の一覧検索と注文システムのアップ作業も最終段階にはいり本号発行までには完成の予定です。書店様や図書館様の現場で使えるものを目指し試行錯誤して参りましたが、予定より遅れたことをお詫び申し上げます。

また、ホームページ 자체の全面リニューアル作業も平行して行っています。『人文会ニュース』の記事のアップ。委員会活動のリアルタイムでの報告などホームページならではの情報を提供したいと考えています。

以上が今年度の活動の中心ですが、（人文会の顔）ともいえる弘報活動を委員会全員一丸となって行ってゆきます。ご支援とともにご意見などいただければと思つております。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

新委員会のメンバーは次の通りです。

弘報グループ

○佐藤英明（白水社）

島田孝久（晶文社）

成田共助（法政大学出版局）

藤代俊久（平凡社）

ホームページグループ

○鎌内宣行（春秋社）

平川恵一（筑摩書房）

江波戸 茂（日本評論社）

（○委員長／○副委員長）

人文会会員名簿

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学出版会内

2004年10月末現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
青木書店	古川 清	175-0092	板橋区赤塚 8-12-12	5997-4051	5967-7691
大月書店	大和 定幸	113-0033	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
紀伊國屋書店	段塙 省吾	150-8513	渋谷区東 3-13-11	5469-5918	5469-5958
勁草書房	吉武 創	112-0005	文京区水道 2-1-1	3814-6861	3814-6854
慶應義塾大学出版会	小林 丈生	108-8346	港区三田 2-19-30	3451-6926	3451-3124
春秋社	鎌内 宣行	101-0021	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	島田 孝久	101-0021	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斎	162-0825	新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
草思社	浴野 英生	151-0051	渋谷区千駄ヶ谷 2-33-8	3470-6565	3470-2640
筑摩書房	平川 恵一	111-8755	台東区蔵前 2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	大江治一郎	113-8654	文京区本郷 7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	江波戸 茂	170-8474	豊島区南大塚 3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	佐藤 英明	101-0052	千代田区神田小川町 3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	藤代 俊久	112-0001	文京区白山 2-29-4 (泉白山ビル)	3818-0874	3818-0674
法政大学出版局	成田 共助	102-0073	千代田区九段北 3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	杉田 啓三	607-8494	京都市山科区日ノ岡堤谷町 1	075-581-5191	075-581-8379
未来社	西谷 能英	112-0002	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
有斐閣(休会中)		101-0051	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
吉川弘文館	馬場 正彦	113-0033	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

代表幹事 大江治一郎
会計幹事 平石 修
書記幹事 新保 卓夫

(◎委員長 ○副委員長)

販売委員会	・企画グループ	◎浴野 英生・西谷 能英・華園 斎・小林 丈生
	・研修グループ	○田崎 洋幸・大和 定幸・吉武 創・古川 清
	・図書館グループ	○杉田 啓三・段塙 省吾・馬場 正彦
弘報委員会	・弘報グループ	○佐藤 英明・島田 孝久・藤代 俊久・成田 共助
	・ホームページグループ	○鎌内 宣行・平川 恵一・江波戸 茂

《最新刊》

徳之島の民俗1

シマのこころ 松山光秀著 3150円
シマの原像を探る貴重な民俗誌。

日本を顧みて 私の同時代史

住谷一彦著 3675円
日本経済論と日独比較共同体論集成。

金子光晴を読もう

野村喜和夫著 2310円
現代詩の俊才が挑む光晴ワールド!

【新装版】土本典昭著

映画は生きものの仕事である 3675円

逆境のなかの記録 3990円

ドキュメンタリー映画のバイブルを復刻!

未来社

※価格は税込
東京都文京区小石川3-7-2 〒112-0002
tel.03-3814-5521 <http://www.miraisha.co.jp>

処刑電流

エジソン、電流戦争と電気椅子の発明
モラン 電気椅子誕生の史実を仔細にこじり、科学技術の社
会利用に入り込む慾意性を浮彫にする。岩館葉子訳 350円

アーレント・ヤースペース往復書簡

一九二六年・四三三通の書簡を公刊。現代世界への透
徹した批判と直の思索の姿。全三巻 大島かおり訳 ￥1500円

丸山眞男書簡集

ロラン・バルト著作集1 ジッド、カミュなどの作家論、旺
盛な演劇批評等 初期論文五九篇を初訳。渡辺謲訳 ￥1500円

小田実、大江健三郎など最後年の書簡と補遺二八一通。卷
末には全巻索引を付した。書簡集全5巻、ここに完結。￥1500円

みすず書房

(税込) 東京文京本郷 5-32-21 <http://www.msz.co.jp>

①徳川慶喜

刊行開始 発売 10月

家近良樹著 (最後の將軍)から
朝敵へー。その謎多き前半生が
ついに明らかになる! 最新か
つ正確な本格評伝。二七三〇円
⑤ 井伊直弼
⑥ 横井小楠と
⑦ 松平春嶽
⑧ 大久保利通
⑨ 西郷隆盛と
⑩ 土旗・土佐の群像
⑪ 橋本龍馬と

幕末維新の個性

全10巻

変革の時代ー。彼らはいかに生きたのか。
個性あふれる群像とその時代に迫る!
四六判 / 4ヶ月毎に1冊刊行
『内容案内』送呈
統刊書目

価格
税込

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

ミネルヴァ書房

今川義元

小和田哲男

●自分的力量を以て国の法度を申付く
国武将今川義元の実像と手腕。二五二〇円
北村季吟

安倍晴明 隕陽の達者なり
斎藤英喜
正宗白鳥 何云つてやがるんだ
大嶋仁 2520

《ミネルヴァ日本評伝選》 第二期開始!

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡塙谷町1
TEL075-581-0296 宅配可 / 価格は税込

平和を破滅させた 和平〈上・下〉

中東問題の始まり 1914-1922

D.フロムキン／平野勇夫、他訳
今日の中東が形成された舞台裏、
生々しい人間模様を活写。ホワイト
ハウスの必読書！ ◆各3990円

耳の悦楽

ラフカディオ・ハーンと女たち

西 成彦 ハーン没後百年——その
創作活動において女たちが果したた
役割に着目し、「怪談」等の魅力の核
心へと読者を誘う。 ◆2205円

タロット大全

歴史から図像まで

伊泉龍一 謎めいた絵柄に秘め
られた人々の世界観や時代の空
気を読み解く、タロット研究の
決定版。図版460点。 ◆4725円

紀伊國屋書店

出版部：東京都渋谷区東3-13-11
営業TEL03(5469)5918 表示価は税込
<http://www.kinokuniya.co.jp>

慶應義塾大学出版会

<http://www.keio-up.co.jp>

痴愚礼讃

附 マルティヌス・ドルピウス宛書簡
エラスムス著／大出晃訳 人文主義
者・エラスムスの不朽の名著をラテ
ン語原書から邦訳。 ●3360円

評伝 西脇順三郎

新倉俊一著 伝記的事実と作品を通して、西脇順三郎の内面に迫る初の本格的評伝。 ●3150円

埴谷雄高の肖像

白川正芳著 埼谷研究の第一人者が、
その生涯と思想の全体像を克明に
描いた文芸評論。 ●4200円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30 【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

青木書店

ローラ・ディヴィス著

麻鳥透江 鈴木隆文訳 ￥2,835

もし大切な人が子どもの頃に
性虐待にあつていたら
ともに眠り ともに笑う 虐待にあつたサバイ
バーの快復によりそいながら、二人の関係を新たに
築いて、くために、Q & Aと体験者の物語から、虐
待被害者のパートナーに具体的なアドバイスを提供。

戦後保守政治と平和憲法の危機

￥2100

東京都千代田区神田神保町1-60 税込
電話[03]3219-2341 Fax[03]3219-2585

甘美なる暴力

待望のイーグルトン悲劇論、難訳完成

悲劇の思想

46判・5040円(税込)

テリー・イーグルトン著 森田典正訳
文学とドラマティカルギーの主要テーマたる悲劇が、イ
グルトンの手によつて哲学、倫理学、心理学、神学、政治
の舞台に移され、さらに文学と舞台と思想の高みからア
ルな人間生活の地平に降り立たれる。長年の研究の成果

東京都文京区本郷2-11-9
電話03(3813)4651〈代表〉
<http://www.otsukishoten.co.jp/>

.....好評・前田速夫の民俗学エッセイ.....

余多歩き 菊池山哉の人と学問

白山神こそ日本の原住民の信仰ではなかったか。被差別の地をくまなく歩き、前人未到の学問をうちたてた知られざる民間学者を描く、初の本格評伝。 ■2415円

異界歴程

円空、菅江真澄など安住しない宗教者を追い、タブーに封印された白山信仰の謎をとおして、日本文化の地下水脈を探る。 ■2940円

晶文社

東京都千代田区外神田2-1-12
電話03(3255)4501
http://www.shobunsha.co.jp

勁草書房

信原幸弘 編

シリーズ 心の哲学

最新の科学の知見を養分として、哲学の立場から心の本性に迫る。入門書シリーズ全3巻遂に刊行！

I 人間篇 2940円
心の自然化をめぐる議論を紹介。

II ロボット篇 2940円
認知科学を哲学的に基礎づける。

III 翻訳篇 2940円
テーマごとに最重要論文を集成。

東京都文京区水道2-1-1 *価格税込
Tel 03-3814-6861 / Fax 03-3814-6854
http://www.keisoshobo.co.jp

■
③ 2 ① 8 卷
■
④ 9 卷
■
⑤ 4 卷
■
⑥ 5 判
・各約
280
頁
・価格
1・2
巻各
3360
円
・□
数字は
配本回数

心理学の新しいかたち

下山晴彦

「全11巻」

ポストモダンと呼ばれる時代に即した
新たな心理学のかたちを創造する待望のシリーズ
●第一線で活躍中の執筆者が斬新な視点から提言
●荒川修作・マドリン・ギンズ／
河本英夫訳 希望が到来するよう
行為せよ。「生命の建築」を提唱
する世界的芸術家による、前人未
踏の建築的身体論の地平。1365円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL. 03(3946) 5666 税込価格

建築する身体

人間を超えていくために

●荒川修作・マドリン・ギンズ／
河本英夫訳 希望が到来するよう
行為せよ。「生命の建築」を提唱
する世界的芸術家による、前人未
踏の建築的身体論の地平。1365円

虐待という迷宮

●信田さよ子／S・キャンベル／
上岡陽江 暴力被害、依存症から
生還した当事者二人と臨床心理士
が語る。何が彼女を助けたのか?
自助グループの力とは? 1785円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
03-3255-9611(価格は税込)
http://www.shunjusha.co.jp/

正義のガンマン気取りの大統領、不安に駆られ「監視」を切望する人々、対米追従にひた走る日本…不透明で困難な時代の「出口」を求めて徹底討論!
4480-86358-3 1890円(税込)

金子勝
藤原帰一
宮台真司
アンドリュー・デウイット

不安の正体!
メディア政治と
イラク最後の世界

筑摩書房

サービスセンター 048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

歴史学研究会・日本史研究会編
最新刊
4 中世社会の構造
—既刊—
1 東アジアにおける国家の形成
2 律令国家の展開
3 中世の形成
〔続刊〕5 近世の形成
〔近世の解体〕6 近代の成立
〔近代の転換〕7 戦後日本論

〔価格〕税込
東京大学出版会
東京都文京区本郷7-3-1 03-3811-8814

日本史講座
〔全10巻〕
●内容見本道里

〔価格〕税込

図説アステカ文明

R・F・タウンゼント著 増田義郎監修 武井摩利訳
14世紀、マヤ文明と入れ替わるように勃興し、数々の謎とともに姿を消した巨大帝国。そのすべてを貴重な写真で伝える。定価3,780円

図説大ピラミッドのすべて

K・ジャクソン/ J・スタンプ著 吉村作治監修 月森佐利訳
ギザの大ピラミッドに焦点を当て、その目的から構造、工法まですべてを詳説。一つの遺構から文明の全容に迫る力作。定価2,940円

図説アラビア文字事典

G・M・ハーン著 矢島文夫監修 緑慎也訳
「図説文字事典」シリーズ第3弾! 芸術にまで高められたアラビア文字の文化を通じて、実際のイスラムの姿を探る。定価2,940円

図書 創元社

http://www.sogensha.co.jp/
〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-36 TEL 06-6231-9010
〒162-0825 新宿区神楽坂4-3頬瓦塔ビル FAX 06-6233-3111
TEL 03-3269-1051

草思社

あたりまえだけど、
とても大切なこと
子どものためのルールブック

〔全米最優秀教師賞受賞〕ロン・クラーク/亀井よし子訳
他者を尊重し、自分を大切にする心を育てる50のルール。今話題のベストセラー。定価1,470円
●本書の子ども向けテキストが10月下旬刊予定

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-33-8 定価は税込価
03(3470)6565 http://www.soshisha.com/